福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

山本武の「陣中日記」下

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 隼田, 嘉彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5931

山本武の「陣中日記」下

隼田嘉彦

はじめに

本稿は、日中戦争に「出征」した山本武の日記の翻刻であり、次の二冊分が掲載される。ただし、本号に収録のものは、見られる如く日中戦争時のものではない。

⑥ 昭和十年三月十七日～八月初旬。

7 昭和二十年二月十五日～昭和二十年十月。

三 翻刻

凡例

各手帳を、先掲の番号に従って、第一冊、第二冊～第七冊と称することにし(○印は省略)、それぞれに解題を付け、本文は日記と覚書の二つに分けて印刷する。本号には第六冊と第七冊が収録される。翻刻に当たっては、できるだけ原本の雰囲気を崩すことのないように心掛けたが、概ね次のような方法に従った。

(1)見出しの日付は統一的な表記にせず、横書きの日記の算用数字を漢数字に改めたほかは、曜日・天候、「二十」「廿」「三十」「卅」など、全て原文のとおりである。

〈例〉1月29日(一月二十九日)、書き替えた場合は、「廿」「卅」を使わない。

(2)鉛筆・筆・万年筆の区別は、その都度本文中に示した。

(3)片仮名と平仮名および仮名遣いは原文のままとした。

(4)漢字は原則として常用体に改めたが、一部旧字体を残したものもある。

(5)誤字・当字・送り仮名のほか武の書き癖などは、意味が通じる限り訂正せず、注も施さなかった。

〈例〉いだゝく(いたゞく)、はじこ(はしご)、お話し(お話)

背ノ(背嚢)、上ト兵(上等兵)、特ム(特務)など

ただし、偏や旁などの間違いや書き損じに類するもので、態々作字するには及ばないと判断されるものはこの限りではない。

(6)本文中の数字は、漢数字とローマ数字はそのまま用い、算用数字は、年月日のほか人数・年令・分量・距離・番地など漢数字

に改めたが、軍隊用語や箇条書の条数など、一部原文通りにしたものもある。

〈例〉10米（一〇米）、100人（一〇〇人）、改める場合、年月日のほかは「十」「百」を使わない。

(7)福井県の地名には傍線を付けた。

(8)校訂者による注はすべて（　）を付けて示し、概ね近世史料集などの約束に従って、傍注に（ママ）（脱）（カ）（衍）などと付け、全体にわたるものは片仮名混じりとした。そのため原文の（　）などはすべて〈　〉に改めた。なお、破損や訂正・抹消などは、□・〻・■で示したが、一部無視したものもある。また会話の記号は「　」や〝　〟など区々であるが、原文通りにした。

(9)句読点と改行は原文を尊重しつつも、校訂者において改めた部分もある。ただし、その区別はしていない。

(10)絵や略図のほか、文字が斜めに書かれたり、重ねて書かれるなどしているため、そのまま印刷しにくい部分は、（写真1）（写真2）と本文中に一行取って注記し、写真を各冊の末尾にまとめて載せた。したがってその部分の釈文はないが、わかりやすくするために一行ほど重複して印刷したものもある。またいくつかの写真には、簡単なコメントを付した。なお、写真の番号は通し番号とする。

(11)書名のほか映画や芝居・歌謡曲の題名などには、適宜「　」を付けた。

(12)武が感動して大きな文字を書いたとみられるものは、稍大きめの文字で印刷した。

(13)欄外に書かれたものは、（欄外）と注記して適宜本文に挿入して示した。

(14)覚書の部分には一頁毎に＊印を付けた。ただし印刷の順序は解題に示す。

最後に二つのことについてお断わりしておきたい。一つは、これらの日記が戦時中のものであることに起因し、かつ戦前にはごく普通に使われていたものであり、武のみが特別に使用したわけではないけれども、現在では使用してはならない語句が見られ、当時の偏見に基づく記述があることに関してである。本稿は史料紹介であるのでそのまま用いているが、もとよりそれを認めたうえでのことではない。

二つ目は、本稿を草するに当たり、多くの方々の御教示を得たが、それらについては、本連載の終了時にまとめて謝意を表させていただきたい、ということである。

（一九九六年一〇月二一日成稿
一九九六年一二月　八日補稿
一九九七年　三月　一日補訂
一九九七年　五月　三日再訂
一九九七年　八月二九日提出）

第六冊

一　解題

形態：小型の手帳、八二枚。頁毎に「月日」「曜日」「備考」が印刷された自由日記様式。タテ一六×ヨコ八cm。右開き。縦書。ほとんど万年筆で書かれている。覚書は初めから記した。

表紙：表裏ともに欠く。扉の部分に左のようにある。

（表）「鯖江歩三六聯隊
　　第五中隊　山本武」
（裏）「満州奉天紅梅町四八番地
　　笹川基様方　浜崎三郎君
　　満州駐屯川岸□部隊
　　松井部隊小野田中隊山本正栄」

内容：武は昭和九年一月、鯖江三六聯隊に初年兵として入隊した。この日記は、二年兵となった翌十年のもので、日中戦争には関係なく、陣中日記でもない。しかし聯隊における新兵教育の実態がわかって興味深いので、翻刻することにした。満州新京守備隊のことも含むが、若者を満州へ派遣するに当たり、国際法のコの字も教えることなく、むしろ中国人に対する偏見を植え付けていること（五月十三日条）、「除隊後ノ予定」（同十五日条）など興味深く思われた。武は十一年一月一日除隊帰宅して、漸く念願の農業生活に戻ることができた。

二　日記

三月十七日〈日〉

起床ト同時ニ、二年兵全員肉迫攻撃班教育の間稽（ママ）古だ。心は已に外出に散って、中々気合は入らぬ。冷い手を物入に突込んで、ザク〳〵霜柱を踏んで基礎的に行ふ。ふと、昨年一期を終って、練兵場で岸下等と共に毎日暖い日を浴ひながら、芳野上等兵らと肉攻を習った事を思ひ出し、転た無量だ。週番士官立腹の関係で、午前八時漸ク終る。一番入浴にコッソリ混浴して、召集兵さんの除隊見送り方々（傍）、懐しの我家に向って外出す。隣りは一恵さんのお嫁取り。家へ入ると相変らず皆んなで喜んでくれる。やはり家は楽しい。弟も妹も皆んな笑顔だ。

三月十八日〈月〉

中隊長殿精神訓話

敬神崇祖

我が国の敬神崇祖の観念は、決して宗教的にのみによって来るものではなく、国民道徳より来るものである。即ち神仏を敬ひ、祖先を崇ねば罰があたると云ふが如きは、此れ支那人の云ふ事にして、我が国に於ては、天皇窮つから祭を行はせられ、範を垂れ給ふて居る。而して敬神崇祖の道とは、誠の道を踏み行ふ、換言すれは、正直に清浄な生活をなすので、一家のまつり事を正しく行ひ、国の祭事〈政〉を行ふゆえんである。「我が国の国祭日は何日か」。

発煙班教育ニ就て

編成　班長以下五名

発煙筒　巾　二〇mノ煙幕構成　一人三本宛

予備員ハ煙ノ薄キ所ニ補充ノタメナリ。

（写真16）

三月十七日（日）

肉迫攻撃班教育

編成　班長以下十一名　一組ハ二名

携帯自雷（地）ハ左右何レニモ投ケ得ル様注意。

（写真17）

肉攻班員ハ、敵戦車ニカクレテ、戦車ノ視覚内ニ入ルコト肝要ナリ。又敵戦車ノ弱点ニ突キ込ムコト大切ナリ。

三月十八日（月）

初年兵ニ対スル注意

一、兵器手入ニ関シ

自己ノ兵器ニハ常ニ注意シ、修理スヘキコトアラハ、進ンテ出スヘキコト。帯剣ノ手入不良。

二、被服ニ関シ

修理ニ出シテ手入不良ニテ返サル、如キハ、最モ不可ナリ。厳ニ注意スヘキコト。

三、態度ニ関シ

上級者ヨリ呼ハレタルトキハ、理由ノ如何ヲ問ハズ行クコト。

三月十九日（火）

初年兵基本射撃第四、五習会

午前早々より壕勤務に行く。仰むいて寸時の暇もなく、鏡（ママ）と■にらめっこだ。少し間違ふとすぐ小言が来る。「此方の苦労も知らないで」、心の底から不平が芽を出す。午後二時漸ク終る。而し一生懸命やって終了後、教官より「御苦労だった」と賞めて戴くと、体の疲れもすっかり直った。

――――――――

本日第五中隊衛兵上番。第一中隊の初年兵一名、銃を折って営倉入を命ぜらる。即ち、営倉ノ衛兵も増加となる。一月二十日皆に見送られて入営し、本日営倉入とは又可愛さうでたまらない。

三月十八日　夕

初年兵ニ対スル試験問題

一、歩兵ノ本領ヲ問フ。

二、教練ノ目的ヲ問フ。

三、各個教練ノ目的ヲ問フ。

四、地形・地物ヲ利用スル要旨ヲ問フ。

以上。

三月二十日（水）

午前初年兵分隊教練、午後対空鑑祝哨

分隊教練本日ノ演練綱目

一、林縁ヨリ出テ、敵ノ不意ニ出テ行フ射撃。

二、分隊ノ射撃目標ノ指示。

三、各自兵ハ、自己ニ対向セル部分ニシテ、比較的明瞭ナル目標

ヲ選ヒテ射撃スルヤ否ヤ。
四、副科目トシテ、地形・地物ノ利用法、趨(葡萄カ)フク前進ノ要領。
五、不明目標ノ発見。
十一時二十分ヨリ、中川少佐・寺田少尉・前田少尉ノ命課布達。

三月二十一日〈木〉

春季皇霊祭

午前五時前突然轟く笛の音、「非常呼集」の週番士官の声だ。全員編上靴、■手執銃着剣にて舎前に整列、第二班は断然整(ママ)々として居た。

「二年兵は射撃場に向って行進」、我ら伍勤上四名は、此れが演習の仮設敵だ。第一回は三六橋にて、第二回は琵琶山にて、第三回は三本橋にて、第四回は神明神社にてと云ふ具合に。相当実員部隊もえらかった事と思はれる。午前七時三十分終了す。午後は余興会にて、又面白く過し愉快であった。

三月二十二日

初年兵分隊教練

午前・午後共分隊教練。前進・停止、射撃目標ノ指示、目標ノ迅速ナル発見、区分前進、各個前進、突撃ノ演練。
午后、前進スル敵ノ射撃、橋梁ノ通運法ノ演練。今日は良ク晴レテ地も乾き良い日だ。然し、稍北風強く相当寒さを感ずる。午後は五時過ぎまで演習を実施、第一班・第四班は駈歩を以て帰営、二班は軍歌演習を以て帰る。
二年兵、本夜夜間演習、陣中勤務。

三月二十三日〈土〉

午前分隊教練、午後内務検査、夜間戦闘各個教練

内務検査ノ目的ハと言ふと、如何にも我々のために行ふ立派な趣旨の下に行ふ様だが、事実はやはり兵隊いぢめのやうにしか考へられない。検査準備で忙しい思ひをして、さて検査となると、仲々御注意を受けること夥しい……。
夜は六時二十分整列、夜間各個戦斗教練。同しやうな事を十時半までやるのだから、実際初年兵及初年兵係は御苦労だ。此れも皆んな御国のためだと思って、心棒(辛抱)すべきだ。まだ〳〵つらい初年兵の第一期だって過した事もあるのだから。

三月二十四日〈日〉

外出

今日は朝っぱらからほんとに気のすゝまない日だった。点呼整列は一番遅い。腹が立つやら、口惜しやら(い脱カ)と云ひたい所を、じっと抑へて気分を取返へす事に努める。
福井、別に変った事もない平凡な町だ。カフェも行きたくない。飲みたくもない。映画でも見るべし。「浮草物語」「大江戸出世唄」、一寸世間の裏町風景をキャチ(ッ脱)した人生の半面を画ける作だ。「ロイドの大勝利」ハ、相変らずのやり方で骨稽(滑)な事無類だ。特に最後の青竜刀の首切り場ノ場面は、何と云ってもグロ百パーセントだ。

三月二十五日〈月〉

命課布達式

午前八時二十分ヨリ、第六新中隊長三次喜平大尉の命課布達式あり。終ると同時に大雨来り、雪中演習場にて各個教練約二時間。午後は鉄条網の破壊口を通過して行ふ突撃、及掩護通過の為行ふ突撃。

三月二十六日〈火〉

総出演習日

連日の晴天続きに似ず、朝から大雨風だ。然し演習は練兵場だ。午前八時整列、分隊戦斗教練、各組毎による突撃の演練だ。此の間絶間なく霙混りの雨が降る。初年兵の防雨外套は、上から下までずぶ濡れだ。昨年もやはり、今日のやうに濡れたものだった。ともすれば可愛さうになって、演習の締める手をゆるみかけるのを、心をはげまして大声叱呼訓練を行ふ。

夜間は各個戦斗教練、我々は仮設敵、防具をつけて初年兵につかせる。寒い事夥だしい。

三月二十七日〈水〉

分隊戦斗教練、小隊教練

既設陣地に於て小隊教練、練兵場西北端の瓦焼場ヨリ状況開始。各分隊の協調等やりながら、鉄条網の通過突撃、射撃・突撃の反復、鳥羽橋方面に向って進出す。初年兵は相当つらかったかも知れぬ。

今日、分隊の中五名だけが、分隊長〈班長〉の云ふ事をきかなかったとて、遂にピンタ（ビ）が飛んだ。田中班長第一回の鉄拳だ。

三月二十八日〈木〉

射撃

午後一時二十分ヨリ、初年兵第六習会、基本射撃。班長ハ下士官、集会場ニテ留守だ。良ク当たればよいがと思ひつゝ始まる。中隊長も来られる。零をうったものは教官に報告の事……。

第一発、北山重次郎より始まる。チクオレカンが出た事落胆してしまった。最初より此の通りだ。最後まで成績不良にて終る。平点以上は、棟朝・増田の二名のみ。己が行くと駄目なのかな。班長の顔を思ひ浮べて淋しい事限りない。

三月二十九日〈金〉

大隊長殿査閲

四月一日実施予定の大隊長査閲は、突然本日午后三時ヨリ実施に変更さる。

午后一時二十分整列にて行く。

三時半より開始、戦斗各個教練。ガスの場合の装面着脱、発進・停止、樹木利用等何時もの通り。

講評は？「第二班ハ…」全く出駄（鱈目）らめに悪い事、カスなものだ。

気の長い俺もいさゝか腹立った。夜は十時半まで夜間演習。

三月三十日〈土〉

軍装検査

午前十一時まで検査準備。

十一時より検査。官ハ各班長・教官・中隊長にして、相変らず二班は事故だらけである。困ったものだ。やはり今年の成績は、第三、四班が断然優勢だらう。第一、二班は不良だ。運が悪いのだ

としか思へない。もう少し俺達や班長の(ママ)

四月一日

風紀衛兵歩哨特別守則

軍旗

一、軍旗・御真影・勅諭・勅語ヲ護リ、聯隊長・聯隊副官・週番司令・聯隊旗手ノ外、手ヲ触ルヽヲ許サス。

二、火災非常ノ際、事急ニシテ上官ノ指示ヲ受クルノ遑ナキトキハ、近クニ居合ハス者ト力ヲ協セ、安全ナ所ニ移シ奉ル。

三、聯隊長室内ニ在ラサルトキハ、室ノ扉ヲ開ク。

表門

一、表門ヲ出入スル者ヲ監視ス。

二、出入ヲ許ス者左ノ如シ。

1、指揮官ニヨリ引率セラレタル者。

2、准士官以上、見習士官及其随従者。

3、下士官ニシテ、公用証・外出証明書・外泊証明書又ハ営外居住証ヲ所持スル者及其ノ随従者、並ニ休日ニ於テ外出ノ規定時限内ニ出入スル者。

4、兵ニシテ、公用証・外出証明書・外泊証明書ヲ所持スル者、及休日ノ外出定時限以内ニ於テ外出証ヲ所持スル者。

5、演習ノタメ、准士官以上又ハ週番下士官ノ証明書ヲ所持スル者。

6、制服ヲ著(着)ケ、若ハ所定ノ徽章ヲ附シタル陸軍文官。

7、憲兵、火災非常呼出証ヲ所持スル伝令、郵便・電信集配人。

8、門鑑ヲ所持スル者及其ノ随従者。

三、右ノ外出入ヲ乞フ者アルトキハ、衛兵司令ノ指示ヲ受ク。

四、准士官以上、見習士官・少尉候補者、之等ニ准スヘキ者及其随従者、並営外居住下士官ノ外、営外ニ物品ヲ持チ出サントスル者アルトキハ、司令ノ検印アル持出証ヲ受ケ、之ニ引キ合セ持出ヲ許ス。

五、荷車・下肥・塵ハ他ノ門ヲ行カシム。

東門

一、東門ヲ出入スル者ヲ監視ス。

二、出入ヲ許スモノ左ノ如シ。

1、指揮官ニヨリ引率サレタル者。

2、准士官以上、見習士官及其ノ随従者、並営外居住証ヲ所持スル者。

3、制服ヲ著ケ、若ハ所定ノ徽章ヲ附シタル陸軍文官。

4、憲兵、郵便・電信集配人。

5、門監(鑑)ヲ所持スル者及其ノ随従者。

三、准士官以上、見習士官・少尉候補(ママ)、之等ニ准スヘキ者及其ノ随従者、並営外居住下士官ノ外、営外ニ物品ヲ持出サントスル者アルトキハ、司令ノ検印アル持出証ヲ受ケ、之ニ引合セ持出ヲ許ス。但シ、下肥及塵ハ持出証ヲ要セス。

北門

一、北門ヲ出入スル者ヲ監視ス。

二、出入ヲ許スヘキ者左ノ如シ。

1、指揮官ニヨリ引率セラレタル者。
2、准士官以上、見習士官及其ノ随従者、並ニ営外居住証ヲ所持スル者。
3、制服ヲ著ケ、若ハ所定ノ徽章ヲ附シタル陸軍文官。
4、憲兵、郵便・電信集配人。
5、門監ヲ所持スル者、其ノ随従者。

三、准士官以上、見習士官・少尉候補者、之等ニ准スヘキ者及其ノ随従者、並営外居住下士官ノ外、営外ニ物品ヲ持出サントスル者アルトキハ、司令ノ検印アル持出証ヲ受ケ、之ニ引合セ持出ヲ許ス。但シ、下肥・塵ハ持出証ヲ要セス。
四、閉鎖後ハ、酒保第二、第三号、雪中演習場第三号、被服庫・将校集会所ノ間ヲ動哨シ、火災・盗難ニ注意ス。

弾薬庫

一、弾薬庫ヲ監視シ、屢々其ノ周囲及土堤ノ上ヲ見廻リ、妄ニ人ノ近寄ルヲ許サス。
二、土堤内ニハ、懐中電灯ノ外火気ヲ持チ入ルヲ許サス。
三、弾薬庫ノ開閉ハ、衛兵司令又ハ営舎係ノ立会ヒアル場合ニ限ル。
四、烈シキ雨雪ノ床下ニ入ルトキハ下窓ヲ閉チ、止ミタル後開ク。
五、警報ヲ要スル場合ニハ、固定警報器ニヨリ風紀衛兵場ニ、又ハ警笛ヲ以テ機関銃隊及第一中隊ニ知ラス。

営倉

一、営倉入ノ者ヲ監視ス。
二、営倉入ノ者ノ面会ハ、准士官以上、見習士官・少尉候補者並衛兵司令ニ限ル。又物品出入レノ立会ヲ要ス。
三、営倉ノ開閉ハ衛兵司令ニ限ル。又物品出入レノ際ニハ衛兵司令ノ立会ヲ要ス。

（四月二日カラ四日ノ記事ヲ欠ク）

四月五日

軍旗祭ニ関スル注意

一、本年ハ日露戦役三十週（周）年ノ記念ヲ迎ヘ、且又軍旗奉讃会成立セルヲ以テ、一層盛大ナラシムルコトヲ望ム。
二、然レトモ、時正ニ非常時局ニシテ、上下相戒メ、挙国振張ノ秋ナリ。以テ能ク挙式ノ盛大ト、酔狂乱漫トモ弁別シ、森厳ナルヘキ軍旗ノ尊厳ニ対シ、又我聯隊ノ軍紀ニ関シ遺憾アルベカラス。
三、本年度最初ノ試ミトシテ、「ラジオ」ノ放送ヲ実施スル予定ナルヲ以テ、余興其ノ他ニ於テ、苟モ軍秩ニ関シ非難ヲ受クルカ如キ言動アルヘカラス。

注意事項

一、戦死者ノ写真ヲ一室又ハ舎外ニ安置シ、若干ノ装飾・供物ヲナスコト。
二、中銃隊特ニ班内ノ装飾ヲ□責ナラシムルコト。
三、兵ノ負担ハ必ス指定額内以内ニテ、如何程ニテモ節約スヘシ。
四、晴天ノ場合ハ、外来者ヲ班内ニ入レシメス、努メテ舎外ニ於テ楽シマシムヘシ。

兵ヨリ父兄ニ通知シテ、酒ヲ持チ来ラサル如クスヘシ。
五、勤務者ニ酒肴ノ支給セカラレサルモノアリ。(ママ)
飲酒シテ式場ニ臥シ、其他酔歩シテ婦女子ニ戯ルヘカラス。
論争・喧嘩ノ所為アルヘカラス。
六、餅撒等ノ場合ハ危害予防ニ注意。
隊外ヨリ借入レタルモノニハ、相当ノ謝礼ヲナスヘシ。
七、検閲終了マテハ、余興等ノ準備ノタメ隊内ニ於テ喧騒ニ亘ルヘカラズ。
無効諸札左ノ如シ。
公用証　二号　11中隊
外出証　一〇、二九、四三　六中隊
聯隊門鑑　四二、五、五六、五七
衛戍病院　九、二六
四月五日〈金〉
教官殿学科
検閲ニ際シ中隊殿(長脱カ)ヨリ試問サレル事項
一、我国民ノ道徳ノ基準トナルヘキモノハ如何。
〈教育勅語。〉
二、我国民ハ幸福ナリ。而シテ其ノ最モ幸福ナリト感ジテヰルコト如何。
〈古イ歴史ヲ有シ、万世一系ノ天皇ヲ戴キ、深イ御仁慈ヲ垂レサセ給フコト。〉
三、強イ国民、強イ軍人トハ如何。
〈強イ軍人トハ、軍人ノ本分ヲ尽シ、上官ノ命令ニハ誠実ヲ致シ、其ノ命令ヲ素直ニ守ルモノガ、即チ強イ軍人ナリ。〉
四、軍人カ勅諭中ニ此レハ有難イト思フコトヲ挙ゲヨ。
〈奉読。〉
五、軍人ノ本分ハ勅諭ニ明ナリ。此ノ聖旨ニ副フヘク皆ンナハ如何ニ実行シテヰルカ。
〈上官ニ対シテ誠実ヲ以テ司ヘ、其ノ命令ヲ守リ、演習・勤務ニ勉励シ、射撃・剣術ニ努力スルハ此レナリ。〉
六、軍紀厳正トハ如何。
〈常ニ命令ガ厳格ニ撒(徹)底実行サレ、協同一致し(ママ)テ軍務ニ熱誠勉励スルハ、即チ軍紀ノ厳正ナルシルシナリ。〉
七、悪宣伝又ハ善悪ノ区別ノツカナイモノヲ手ニ入レタル場合ノ処置如何。(ママ)
三国　五十嵐　高橋松　青木　田中
松田　河崎清松　片山　高橋七
(四月六日ノ記事ナシ。)
四月七日
検閲開始
軍装検査及各個教練

緊張其の極に達ス。
午前八時半開始。全く無我無夢中、真剣に受験す。
講評は！　片唾(固)づを飲んで待つ。
整列良好、軍装良し、第二班は、伏射の射撃姿勢良好なり等々。
全く良好づくめだ。安神(心)々々。
（写真18）

四月十二日
一、正直ナレ。糊塗・粉飾スルコト勿レ。
二、物品〈兵器・被服〉一切ノ愛護。
三、確実性ノ養成。複(復)唱ノ実行。
四、衛生上ノ実行。
◎五、射撃。
（写真19）
（写真20）
（写真21）
（四月十三日ヨリ二十一日マデノ記事ヲ欠ク。）

四月二十二日〈金〉
戦車　福岡特曹殿
戦車ノ性能
一、運動迅速テアル。
二、機甲丈夫ニシテ戦斗力大テアル。
三、奇襲的威力大ナリ。
四、広ク活動シ得。
五、敵陣深ク入リ込ミ戦斗シ得。
六、諸種ノ障碍物ヲ破壊シ、敵陣深クサウ索ス。即チ防禦組織ヲ破壊ス。
七、歩兵ノ突撃ヲ援助ス。
戦車戦斗
一、大隊ノ正面ニ対シテハ、戦斗ヲ有利ナラシメル為メニハ、戦車一ケ中隊〈約十五台〉ヲ要ス。
二、戦車ハ、歩兵砲・機関砲其ノ他砲兵ニハ機甲ハ破レル。戦車ハ、陰(隠)蔽地ヨリ近接シ得ル。又、歩兵ノ突撃ヲ阻害スルMg・歩兵砲、其他側傍火器ニ向ッテ、此レヲ破壊ス。
三、戦車ハ、敵陣内ニ入ル故、身(味)方ノ砲兵歩兵ト緊密ニ協同スルコト必要ナリ。
戦車ノ長所
一、卓越セル機動ト、装甲ニヨル掩護。
戦車ノ弱点
一、地形・地物、又ハ人造ニヨル障碍物ニヨルリ、行動ヲ制限セラル。
二、天候・気象、明暗ノ度等ニヨリ、行動ノ自由ヲ制限サレル。
三、装甲内ハ、気温上昇シ又騒音ニテ、チョウド盲ニテツンボノ如キモノテアリ、又発動キ(機)ノ爆発ヲ見ルコトアリ。故ニ連続運転ヲ得ス。
四、火力ノ威力不充分ナリ。
○戦車ハ、捜索ニノミ来ルモノ及戦斗ヲ目的トシテ来ルモノノ二

種行動ヲス。

戦車ノ速度

八九式軽戦車　最モ多ク用ヒラル。　重量　一〇ton

巾　二・一五　高　二・二〇　長　四・三〇　lg二銃

9式lg二　戦車砲五七mm　一門

壕ハ尾体ヲ附セハ二米五〇マテ跳ヒ越ス。

尾体ヲ附セサル場合ハ二米。

傾斜面2/3マテ登ル。水深一米。

時速　三〇km　装甲　一五mm～一七mm

乗人　四名

九一式重戦車

重量　一八トン

乗人　五名　lg　三銃　砲　一門

速度　二五km

肉迫攻撃班

携帯地雷
携帯爆薬　ニヨリ爆発。

肉迫行動ニヨリ破壊。

発煙筒・銃剣・拳銃・石灰泥・鉄棒。

小十字鍬　手榴弾ノ結束セルモノ。

敷設地雷。

肉攻班編成

班長以下十一名

五組〈一組ハ二名〉

（写真22）

戦車死角　最近ノ戦車ハ殆ント死角無キモノト思ヘハヨイ。

肉迫攻撃班ノ編成

一ケ中隊ニ二ケ班ヲ作ル。

一ケ班ハ五組ニ分ケル。人員ハ十名。

班長ハ分隊長ヲ以テ充テル〈通常〉。

体形

（写真23）　一線配置

梯子配置

（写真24）

東海の顔役

夜は冷い心は寒い

渡り鳥かよ　おい等の旅は

風のまにまに　吹きさらし

風が変れば　心も変る

仁義すごろく　丁半かけて

渡るやくざの　たよりなさ

亭主持つなら　堅気をお持ち

とかくやくざは　苦労の種よ

恋も□□（人情）も　旅の空

（四月二十三日カラ五月三日ノ記事ヲ欠ク。）

五月四日〈土〉

内田少尉殿学科

一、編上靴ハ石廊下ニ置クヘキコト。
二、石鹸・歯ミカキ等ヲ所持シナカラ使用セサルハ不可。
三、避難縄ノ使用時期。
四、貴重品ノ保管。
五、引率ヲ確実ニナス。
六、監的ノ材料ヲ大切ニ取扱フコト。
七、患者入浴ノ励行。
八、寝冷エヲシナイコト。
九、汚物ノ洗濯ヲ□□シテ行フコト。
十、受持区域ノ掃除ヲ完全ニスルコト。
十一、物品ヲカクサヌコト。

今後ノ複雑ナル戦争ニ対スル覚悟　中隊長

戦争ト戦斗

戦争トハ、国家ヲ挙ケテノ戦ヒニシテ範囲ハ広イ。
戦斗ハ、小範囲ニ於ケル肉弾ニヨル戦ヒテアル。
而シテ戦争モ戦斗モ極メテ複雑化サレテヰル。
儒教〈王仁〉
仏教〈一二一二年、キン明天皇〉
キリスト教
欧米思想
〈米〉デモクラシー〈民主主義〉
〈ロ〉過激□□（思想カ）〈過激主義〉
欧米思想ニヨリ国民□放縦ニナリ、反抗心ヲ有スル様ニナリ、又破壊的ニナッテ来タ。

戦場心理

一、恐怖感（観）念、状況不明ナル場合。
二、新シイ戦機ヲ見ルト、極メテ不安ニナル。
三、群衆心理ノ支配。

戦斗ノ勝敗

威力ノ優劣。
地形。
天候。
時刻。
威力トハ　一、指揮ノ巧拙。
二、軍隊ノ精粗。
三、兵数ノ多寡。
四、器材ノ整□

軍隊ノ精粗

（写真25）
（五月五日ノ記事ナシ）
五月六日〈月〉

中隊長

一、突撃支援射撃前。
1、重擲ニヨリ発煙〈重テキノ発煙弾ハ、約一分二〇、巾五〇m〉。
2、発煙班〈八八式発煙筒、約二分、巾八〇m―二〇〇m〉。

3、破壊班。
次ニ突撃支援射撃。
突撃。
二、突撃支援射撃ニ連繋。
1、最後ノ砲弾ト共ニ。
2、発煙班ヲ出ス。
3、続イテ破壊班ヲ出ス。
破壊ト同時ニ突撃。
故ニ此ノ場合ニハ、相当砲弾ニヨリ鉄条網カ破壊サレ、概裂(ママ)
破壊口ガ出来テヰル場合。
三、突撃支援射撃ノ間断ヲ利用スル法。
四、重機関銃・軽機関銃ニヨリ、破壊口作(炸)裂ニヨル法。
弾ハ距離ノ約二倍。
(五月七日カラ十二日ノ記事モナシ)
五月十三日〈月〉
中隊長
満州国ニ就テ
独立　昭和七年三月一日〈大同元年三、一〉
溥儀〈宣統帝〉。
皇帝　康徳帝。
行政
黒竜江省・吉林省・奉天省・熱河省ノ四ツニ大別シ、全部ヲ十四省ニ細別サレテヰル。細別ハ、熱河ノ興安附近及黒竜江省ヲ細カク別ケラレテアル。
東支鉄道〈三月譲渡〉名前ハ変更。
吉会線　南満州鉄道。
警備
満州境界監視隊〈約三分ノ一ハ日本兵〉。
満州里山海関。
治安維持ノ法
日満議定書ニヨリ、日満両国ハ常ニ協同シテ国防ニ当リ、日本ハ常ニ所要ノ兵数ヲ駐頓サセルコトヲ得。
土地
奉天以南　大平原。
ハルピン附近ハ大□江□。
吉林……森林□□。
黒竜江省ー不毛ノ地ニシテ鉱山。
熱河　山岳地□□□。
広サ、面積
七万五千三百余方里、日本内地二万五千、約三倍ナリ。
人口ハ日本内地ノ約半分。
産物
鉄　四億七千万トン。
石炭ハ二八億トン。
石油・材木
支那人ノ性質

一、個人主義。
二、恩ヲ知ラヌ。
三、疑ヒ深イモノ。
四、口銭ヲトルコトヲ当前。
五、惰ケテ金ヲ貰（儲）ケル。
六、盗ムヲ当前。
七、盗ヲシテモ返セハ罪ハ消ヘルト信シテヰル。
八、□ヲ立テルコト。
九、義ヲ見テ勇ヲ起ス気ナシ。
十、バクチヲヤルコトヲ平気テ居ル。
十一、嘘ヲツクコトヲ平気テアル。
十二、元首ハ誰タリトモ平気デアル。
十三、□イコトハ平気デヤル。
十四、協同出来ナイ人間テアル。
十五、威力ニハ圧伏スル。
十六、意志弱イ。
十七、□□□□□□ヲ考ヘル。
十八、目前ノ利ヲ競フ。
十九、権力ノ前ニハアキラメル〈メーファズ〉。
二十、健忘症。
二十一、和ヲ始末スル気ナシ。

第一基点

（写真26）

五月十四日〈火〉

分隊戦闘射撃

中隊長殿講評

兵ノ射撃動作ハ概ネ良好ナルモ、左ノ如キ事ニ注意ヲ要ス。
沈着ヲ欠クモノアリ〈河上〉。
分隊長ニ対スル注意稍足ラサルモノアリ〈斎ト〉。
第一発ノ射弾一名遅レタルハ不可〈渡辺〉。
動作緩慢ナルモノアリ〈若林〉。
他ノ者ハヨク沈着シテ動作良シ。
斎トノ前進スル重キ（機）ヲ速ニ発見、独断射撃セル動作良好ナリ。
然シ、若林ノ銃ヲ此レニ指向セサルハ不可。
第一回ノ射撃ニ於テハ、全部櫛ノ歯ノ如ク銃ガ指向セルハ良好ナルモ、第二回目ニ右ノ軽キ（機）ニ対シ二十八発射撃セルモ、命中弾ナキハ不可。
前進スル重キニ対シ、全部ノ銃ヲ指向シテ叩キ壊スハ良キカ、一名遅レタルハ不良。

（欄外、下）「挨拶」

分隊長ニ就テ。
号令的確ヲ欠ク。又射撃中ノ兵ノ動作ハ、一々後ロニ行キテ、銃ノ指向ヲ見テヤルコトニ注意スヘシ。
第二回ノ射撃ニ於テ、右ノ軽キニ対シテ右ノ兵ヲシテ射撃セシメタルハ、樹木ノ関係上射テナイ故ニ、左ノ兵ニ此レヲ射撃セシメ、右ノ兵ハ左ヲ射ツ方ガ良シ。

命中率ハ、前ノ分隊ニ比シ良好ナルモ、稍ク〇・一テハ不足、〇・二位ハ命中セシムル腕テナクテハナラヌ。

大隊長殿注意

一、兵ノ射撃動作ハ良シ。然シ、左ノ的ニハ良ク命中セルモ、右ニ対シ命中弾ナキハ深ク研究ヲ要ス。

五月十四日〈火〉

福岡特曹

主要ガス性状

窒息性　ホスケン、無色気体、空気ヨリ三倍半重シ。呼吸器系統ヲ作用、窒息セシム。

則効

クシャミ性　ヂフアニール、粒子灰性、臭気ナシ。鼻・咽喉ヲシケキ、（嘔吐カ）オードヲ催ス。

一時性

中毒性　一酸化炭素、無色気体、空気ヨリ〇・〇五軽シ。無臭、神経系統・血液ニ作用ス。死ス。

則効時（ママ）久性　催涙性塩化アセトフェノール、黄褐色固体、芳香刺劇、眼ノ粘膜・視力障害。

遅効持久性　ビラン性イペリット、暗紫色液体、空気ノ五・五位ノ目方、茄子ノ臭、皮膚ヒラン性、眼・呼吸器ヲ害ス。

稍持久性　ルイサイト、黄紫色液体、七倍、天ツニ発臭。

五月十五日〈水〉

上候ノ学科　内田少尉

一、指揮ニ便ナル地二点位。

1、射撃動作。

2、地形・地物ノ利用。

3、敵情・地形観察。

4、射弾観測。

5、比隣分隊ニ注意。

小隊長

二、小隊長ノ命令・号令ヲ比隣分隊ニ伝達、敵情報告。

突撃

一、火力ノ発揚。

1、（着）著剣。

2、手榴弾準備。

二、敵陣内ノ視察　側防機能。障害物。地形。

三、小隊長ノ命令ニ基ク部署。

1、分隊ノ奪取陣地。

2、障碍物通過ノ順序・方法。

3、突入ノ方法。

陣内攻撃

射撃・突撃ノ反復互用。

1、部下ノ掌握。

2、陣地内部ノ状態。

沈着シテ敵情ニ注意シ、敵ノ弱点看破。

3、方向ノ維持。
4、lgトノ協同。

除隊費用

一、軍服　一三、〇〇
二、軍帽　二、〇〇
三、靴　七、〇〇
四、雑品　三、〇〇

みやげ

一、親類八戸　五、〇〇　二戸ハ壱、〇〇宛、六戸ハ五〇宛
一、村ノ家々へ　一二、〇〇〈一戸平均十五銭宛〉
一、青年会へ　五、〇〇〈手拭一すぢ宛及酒肴料〉
除隊祝費　一〇、〇〇
合計　五七、〇〇

除隊後ノ予定

七月一九　除隊
二〇　オ礼挨拶、歩キ。
二一　鯖江・武生・福井。
二二　家事。
二三　〃
二四　〃
二五　□□□
二六　〃　海水浴
二七　〃
二八　〃
二九　〃
三〇　〃
三一　〃

農事
1、西瓜・瓜類手入。
2、畦草刈リヘ行ク。
3、晩稲不良ナルモノニ施肥。
4、茄子施肥、灌水。

本年度計画

八月上旬　茄子・西瓜・瓜類収穫。
盆　中旬　西瓜・胡瓜・瓜類蔓マクリ。
秋物播種準備。
下旬　大根・白菜等秋蔬菜播種、灌水、ネギ定植。
九月上旬　発芽セル蔬菜間引、農林一号稲刈リ。
中旬　〃　間引、施肥、大場稲刈リ。〈秋祭リ〉
下旬　早生キンポ刈取リ、早生物ノ稲扱キ、臼摺リ。
十月上旬　蔬菜手入、銀ポ刈取リ、ネギ施肥、土寄セ。
中旬　糯刈リ取リ、十四日頃秋季演習ノタメ入営。
三番草除草完了。

下旬　秋季演習

十一月上旬　秋キ演習ヨリ帰宅、晩生稲刈取終リ、大根施肥。
十一月中旬　ネギ土寄セ、稲扱キ、臼摺リ等。
下旬　秋終リ、大根・白菜・葱収穫始メ。
三十日除隊兵迎ヘ〈正栄君ノ除隊〉。
十二月上旬　蔬菜収穫終リ。

中旬　製縄、牛蒡・長芋堀リ、温床土準備。
下旬　製縄。

満州

（写真27）

五月七日

上番風紀衛兵

司令西森伍長ナリシ所、拙者ト変更セラル。

司令以下十九名服務ス。以前ノ如キ失敗アランカト冷ヤ〳〵ス。

（五月十六日カラ十八日ノ記事ヲ欠ク）

五月十九日

第二内務班〈二十三名〉

空砲　各班三十箱

洗矢　五本　　円筒掃除器　三本

薬室掃除器棒　四本〈内旧式三本〉

旧式練脂器　各班十個〈混合油・複合脂油〉

テープノ件

（五月二十日カラ六月二日ノ記事モ欠ク）

六月三日〈月〉

中隊長殿学科

満州ニ就テ

満州ニ於ケル兵力

岩越部隊　名古屋第三師団

蒲　部隊　京都第十六師団

独立守備隊　二〇―二五大隊

川岸部隊

越境部隊

機械化部隊

騎兵旅団

六月三日〈月〉

四声　第一声　阿。阿。阿　阿。（声調符号ハ省略）

（写真28）

一ノ字ハ、次ニ四声ノモノ来ルトキハ二声ニ発音ス。

二個ノ場合ハ、倆 liang個

1、站　住　別　走　〈站　住　罷〉　止マレ。（ルビ省略）

（写真29）

6、你　打　那　児　来　　オ前ハトコカラ来タカ。

（ママ）

你　上　那　児　去　　オ前ハトコヘ行クカ。

（写真30）

你　早　起　来　了　　オ早ウ。

被服庫整理ノタメ、十一日―十四日、兵一、午前八時迄ニ経理委員事ム室ニ差出シ、委員ノ指示ヲ受ケシムルコト。

（六月四日カラ十六日ノ記事ヲ欠ク）

六月十七日

淋しい心

俺は淋しい。良き戦友達と別れ、宮脇と別れ、北川と別れ、可愛いゝ初年兵達と別れて、六中隊へ一人行かねばならぬとは。中隊では二番の伍勤も、六中では四番位にしかなれぬのだらう。俺も男だ。俺は皆んなから馬鹿にされて居るのだ。俺のまじめな心が判らぬのか！　士は己を知る人のために死すとか。俺は内田少尉が懐しい。

第二小隊第二分隊　　長　山本上ト兵

馬一　上田清勝
□　武田秀雄
通上　小鍛冶政信
○□二　三井　実
靴二　多葉田三郎
○自動車二　村田　清
破嶋一　小林健二
馬二　内倉　栄
櫛二　田中　武
櫛一　佐々木甚作

渡満ニ際シテ大隊長訓示（ママ）

（六月十七日カラ二十五日ノ記事ナシ）

六月二十六日〈水〉

寺田少尉殿学科

船酔ヒノ予防法

一、船ノユレル方向ノ横ヲ向イテヰルコト。
二、船ヨヒシカ、ッタ者ヲ冷笑スルモ一方法ナリ。
三、船酔ヒを催シタルトキハ、最初ハ成ルヘク伏臥スルコトナク、新鮮ナ空気ヲ吸フコト。
四、嘔吐ヲ催シタルトキハ、遠慮ナクハクコト。
五、□□ハ水カ良イ。

鯖江七、一八　武生　今庄　杉津　敦賀
中ノ郷　長浜　米原　京都　□□四、三〇
尾ノ浜三、二〇着

六月二十七日

毛布二枚に包まれて、兵営に於ける最後の一夜をの夢を結んだ我々は、午前二時全員起床。窓を眺むれは、空は晴れてチラ〳〵星が輝き、すが〳〵しい夜明けだ。四時二十分、赫々たる武勲に輝く軍旗を奉じて、歩武も堂々と進発す。沿道は歓呼の嵐だ。午前五時半鯖江惜陰校に到着す。山本武と大書せる旗が目立ツ。聯隊長の注意事項も終り、やがて懐しの父母の下に駆け寄る。父さんも居る、母さんも、妹も弟も、若い衆も、村の人々も皆んな居る。「しっかりやれ」「御苦労さんです」等々、激励の言葉を浴びせてくれる。結構な事だ。軍人なればこそかくも皆が思ってくれるのだ。自己の責任の重さがいやが上に感ぜらる。

「食物に気をつけねばならないよ」「水には特ニ気をつけ」母は一番気苦労性であり、自分を思って居てくれる。三十分の時間は実にしばらくだ。早くもラッパの号音、「さようなら」「さようなら」「気を付けて」彼等の言葉を後に又銃線につく。母と妹と田辺君と三人は、すぐそばまで来て下された。「拝げ銃ッ」「右向け右！」「前へ進め」母と別れて一路駅へ！

駅の構内では直ぐ父が来て下さった。乗車後相当の時間がある。もう話しすることもない。名残も惜しくない。唯もう七時十八分の発車を待つばかりだ。やがてあちらこちらから万歳のどよめきが湧き立つ。もう時間だ。突如汽笛、長い汽笛だ。別れの会(合)図である。しづかに汽車は動き出した。「万歳々々」お父さんの万歳の姿が遂に見えなくなった。

今度は直ぐ西側へ移った。母は！　弟は！　妹は！　と血眼になって探す。「判った」時の嬉しさ。向ふでも判ったらしい、しきりに妹が手を振って居るのが見える。母は涙を拭いて居るのか、顔を上げては又ハンカチーヲ(フ脱)顔に当てゝ居る。思はず僕も眼頭が熱くなって来た。泣いてはいけない、晴の門出ぢゃないか。如何にさう思っても、悲しさがこみ上げて来る。もう心の中では泣き出して居る。然し軍人だ。涙の出るのをこらへこらへて、遂にこらへた。もう今は母の姿も小さくなってしまった。

「吉川村」「山本武」等々の旗が見えて、何れも皆さんの顔が見えて居る。

懐しの故郷よさらば。皆んな元気で暮してくれ。我生還を期せず。

白木庄附近では、平井の村もけぶって見える。さらば。

午後三時二十分、すっかり汽車の厭になった頃、神戸尾ノ浜駅に到着す。直ちに所要の使役が出て、残りは大楠公の湊川神社に参詣。丁度大阪の伯父さんが来て居られるのに会ふ。宿は㊀と云ふ小さな宿に宿泊す。待遇の悪い事仕方が無い。夜何処かへ遊びに行きたいとも思ったが、自重し寝に就く。

明くれば二十八日、愈々故国を後に満州へ出帆する日である。夜来の雨も稍小降りになる。自分は大隊旗手を命ぜられた。神戸ノ埠頭に於て聖旨の伝達式あり、午前九時乗船完了ス。船の中は、聞きたる通りの狭い、むし暑い、いやな感じのする所である。やがてすさまじい気(汽)笛の音。スワコソと甲板に出る。正に出帆だ。打ち振る旗々々、万歳の叫び、在郷軍人のラッパの音、あちこちの大小無数の船の鳴らすドラの声、神戸の港は全部を挙げて我々の門出を祝福してくれるのだ。正に感激の絶頂だ。船はしづ〳〵と桟橋を離れて行く。波止場を出る頃、在郷軍人会のランチも婦人会の舟も、別れを悲しむが如く、気笛を鳴らしつゝ別れて行った。神戸の街は段々雨に煙って薄れて行く……。

瀬戸内海は奇麗だった。然し惜しい事には、丁度良い所は夜間であったため、見る事が出来なかった。

六月二十九日

午後四時三十分頃関門海峡を通過す。折柄梅雨はショボ〳〵降り、風も無く波も無し。下関及門司は雨の中に煙って見える。沢山の船舶に囲まれた中を、軍用船は通って行く。アチラの船もコチラ

の船も、一斉にドラを轟す。一種云ふに云はれぬわびしさを催さ(ママ)しめる。余りの雨のため、船倉内の個室に入り、又ゴロ寝になって休んで居る。稍波が高くなって来たらしい。

六月三十日

夜明方フト眼を覚すと、船は余程ゆれて居るのか、座って居ると眼が廻って居られない。

折柄嘔吐をやるものが居る。皆顔色が青い。

此の日は一日は、自分でもとう〳〵飯も食べられす、顔は青くなり、胸悪く苦しみ続けて過さねばならなかった。

体が悪くなると自然故郷を思ひ、両親を思ひ出す。

今頃父や母は何して居るだらうか。ショボ〳〵雨の降る日に、田の草取りや、中耕をして居る姿が目先に映る。お祖母さんは僕の事を心配されて、お題目を唱へて居られる事だらう。可愛いゝ妹や弟の顔、あどけない信夫の顔が、苦しい中に、夢の如くうつゝの如く思い出されて仕様がない。それでも午後の七時頃には、漸く玄海の荒波、朝鮮海峡の波の所も過ぎ去って、稍楽になった。

七月一日

白々と東の空の明るくなる頃、甲板上に出でてみる。

海は青黒く、遥かの地平線には薄いもやがかゝり、空は晴れて、今日の天気の良さを無言の中に物語る様。船は音も無く穏かな波の上を走って居る。

夜も全く明け離れる頃には、東の方にポッカリ朝鮮の山々が浮び、東雲は輝いて全く神々しいばかり。

空は青い、海も青い、大海原だ。日本晴だ。昨日に変って身も心も晴れ〳〵として、船倉になんか居たくない。甲板上に出る。洗濯・顔スリ等々、すっかり良い気分になる事が出来た。

七月二日

今日そ、大連上陸の日である。夜明け早々より、食事分配だ、下船準備だと、騒々しくて眠れない。昨夜のは雑誌に読みふけって十二時過ぎだった。然し、昨夜は一時間長くなったものだ。当然の事だが不思議の様にしか思へない。

午前七時頃より漸く大連港の気分が出て来る。海は奇麗だ、全く絵に描いた其のまゝの国である。

八時頃船は大連港に到着す。

大連埠頭、それは実に素晴しいものだ。やはり東洋一を誇り得る立派なものである。八時半より愈々上陸開始である。此の日自分は梱包の使役となって、上陸第一歩は正ニオヂャンである。

大連埠頭の珍風景。埠頭には数多の苦力が居る。その角恰(ママ)たり(る)や、正に人間世界を離レて居る。ボロを着た者、支那服のよごれたもの、色の黒いお猿のやうで、乞食のやうできたない。実に見苦しい限りである。それがあちらにもこちらにも、幾百とも知れずうよ〳〵して居る。暇さえあれば昼寝する事に懸命だ。叱られると又逃げては働くかと思ふと、我々の食べた弁当の残りをあさって食べて居る。甚しきは、サイダーの飲み残りを拾って、無(夢)中になってのどをゴク〳〵させ乍ら、喜んで飲んで居る。実に憐れと云ふもおろかな話である。唯彼等の無恥を、彼等の境遇を可愛さう

に思ふのみである。
今日の使役は、遂に午后六時過ぎになってしまった。重い背ノを背負って、広い大連の街を宿舎たる兵舎に入ったのは、午後七時半頃であった。大連の街は立派であり、大きく奇麗である。然し何となく、異国情緒のする所の存在を感せられる。交替兵舎で入浴に入って、夕食を終り家庭へ通信をなす。丁度、修学旅行時のやうな気分になってしまった。
（六日マデノ記事ナシ）

七月七日

中隊長注意事項

一、マスク・腹巻ノ使用ニ就テ。
二、吸殻入ノ捨場所ノ区別ニ就テ。
三、健康手簿ノ記載ニ就テ。
四、窓ノ開閉ニ関スル件。
五、室ノ乾燥ヲ防ク方法ニ就テ。（ママ）

一、皇軍ノ第一線ニアルコトヲ努力自覚シ、（ママ）

七月八日

現在ノ警備司令官　佐野少将

（写真31）

新京ニ在ル部隊

新京警備隊
新京歩兵独立守備隊

在新京隊

非常ノ場合ノ処置

一、非常警報
二、命令受領、将校止ムヲ得サレハ下士官

上田　梅田　田中作　福田　高橋　丹羽　山田
向　小鍛冶

夜間〈夕食時限ヨリ翌朝起床時限マデ〉仮眠スルコトヲ得。
装塡ハ薄暮此レヲ行ヒ、弾ハ薬室ニ入レナイ。
翌朝弾抜ケヲスル。又司令室通過ノ際ニハ弾ヌケヲ行フ。
弾薬取扱ニ就テハ、特ニ爆発ヲ防クコトニ注意シ、不慮ノ危害ヲ予防スル必要アリ。

衛兵ノ最モ大切ナコトハ、

一、敬礼　二、服装　三、態度　此レニ加フルニ、控兵ノ敬礼ト呼ブ発唱ヲ明快ニ行フコト。
午前八時ニ専属副官ニ服ムノ景響（ママ）を報告スル。
但シ、専属副官居ラサルコト多キ故、其ノ場合ハ憲兵ニ通報ス。
午前八時ニハ司令ニ連絡スル必要アリ。
又、司令官ノ行動ニ就テハ、積極的ニ連絡スル必要アリ。
（七月九日・十日ノ記事ナシ）

七月十一日

（写真32）

衛兵班司令ノ任務

一、官邸衛兵班司令ハ、衛兵司令ノ命ヲ受ケ官邸ノ警戒ニ任ス。
二、平常時ニ於ケル歩哨ノ配置、附図第二ノ如シ。
三、夜間ハ歩哨ニ手榴弾一ケヲ携帯セシム。
四、諸門ノ開閉時限左ノ如シ。

正門	午前六時開		午後十時閉
正門脇小門	后十時		前六時
通用門	前六時		后十時

五、非常火災ニ於ケル処置、別紙第一、第二ノ如シ。
六、外来者ニシテ特守班以下ノ者ニ対シテハ、案内者ヲ附シ受付ニ至ラシム。
　但シ、通用門ニ来ル前、次ノ者ニ対シテハ信号ニヨリ案内者ヲ派遣シ、衛兵所ニ伴ハシメ、来意ヲキキ、後前項ニ準シ処置ス。
七、外来者ニシテ疑ハシキモノハ検閲シ、尚必要ト認ムルトキハ、官邸憲兵ニ通報シ処置セシム。
八、電流鉄条網ノ電流開閉及警備用電灯ノ点滅ハ、副司令自ラ之ヲ行フヘシ。電流鉄条網ニ電流ヲ通スルハ、夜間及特ニ指示セラレタル場合トシ、電流ヲ通シタルトキハ、速ニ全員ニ告知ス。
九、警備副司令ハ、警備情況ヲ毎日午前八時、専属副官ニ通報スルモノトス。
十、各所警ホキ及□□ニ依ル信号ヲ左ノ如ク定ム。

非常警報　――　　用事アリ来レ　――

点検　・・・・　　司令官散歩　・―・―

十一、官邸直接警戒ノタメ、夜間ハ概ネ毎時巡察ヲ派遣ス。
十三、歩哨ノ特別守班、左記ノ如ク軍司令官散歩ノ際ハ、援兵ヲ以テ、第一、第三歩哨ニ服ムセシムルモノトス。
　快走〈早ク走レ〉槍＝銃
　　（写真33）
　多謝々々、謝々＝有難う

（十二日カラ十四日ノ記事ナシ）

七月十五日

衛生講話

伝染病

飲食物ヨリ伝染スルモノ。
　赤痢　腸チフス　パラチフス（A　B）　コレラ
扁桃腺ヨリ侵入スルモノ。
　猩紅熱　流行性脳脊髄膜炎　ヂフテリヤ

花柳病

淋病　梅毒　軟性下疳　第四性病

淋病ハ、約二、三日後ヨリ徴候ヲ現ハス。尿道ガカユクナリ、後痛クナル。以後膿ヲ出シ、淋毒性副睾丸炎等ノ病気ヲ起シ、又子供ガ出来ス、女ニ染ルト子宮内膜炎等ヲ起ス。

○梅毒、三週間目位ヨリ病状ヲ現ハス。始メ小サナ傷ロガ出来、ソコヲオサエルト硬イ。後ソコガ腐リ始メ、症状ガ進ムト髪ノ毛ガ抜ケタリ、鼻ガクサッタリ、眼カ見エナクナッタリス

ルコトガアル。又此ノ病ハ子供ニハ先天的ノ梅毒トシテ伝ハル。スピロヘータ（パリーダ）ト言フ菌。

○軟性下疳、始メ小サナ傷ガ出来、膿ヲ出シ、其ノ膿ニヨッテ又幾ツモ出来、後淋巴腺カハレテ横根トナル。

七月十六日

軍司令官閣下訓示ト勅諭ノケ条

○一、その隊伍も整ひ、節制も正しくとも、忠節を存せざる軍隊は、烏合の衆に同しかるへし。

○二、上官の命は、実は直ちに朕が命を承る義なりと心得よ。

○三、上下一致して□□□勤労せよ。

◎四、武勇には、大勇あり、小勇ありて同じからず。血気にはやり粗暴の振舞なとせんは、武勇とは云ひ難し。

七月十六日

八九式重擲弾筒ノ学科

1、筒　2、□□　3、整度器　4、撃発機関

5、駐板　6、外皮　7、□□

重量　四K七〇〇　斜射角　四十五度

発射弾ハ、元十年式擲弾筒ニヨリ発射セルモノ全部及八九式榴弾ヲ射ツ。

八九式榴弾　六七〇m－一二〇m

曳火手榴弾　一九〇m－四〇m

名称

□□　整度器　□□　□□　撃発機関

外皮　駐板

筒

方向照準線　筒底　座板

筒身　口径五〇㎜　長サ二四㎝

駐コウ　転輪　底塞　□□□□□　逆釣

撃□体室

連続筒　バネ筒　□釣筒　バネ受　撃□

底□　底□　引華　三角カノ？　蓋螺

一、1、起床ト同時ニ窓ヲ開放スルコト。

2、点呼整列ノ迅速。

3、受持区域ノ掃除ノ徹底。

4、食事分配ノ公平、上等兵ニ於テ点検後食事始メ。

二、1、演習整列時日課ヲ特曹ヨリ聞クコト。

2、出場人員ノ調査。

3、整列ノ迅速。

4、整列後ノ点検。

三、各工場使役兵ノ出場セシヤ否ヤ。

四、診断患者ノ受診。

火災ノ処置

1、消防控中隊ハ軍旗護衛ヲシテ、特機ノ率ヰル一ケ分隊ヲ軍旗ノ下へ。

2、伝令大本、聯本へ差出ス〈其ノマヽ〉。

3、風紀衛兵所へ兵三（水筒、執銃）。
4、工ム兵中一名宛、守ム兵・当番兵各勤ム先へ。服装ハ、徒手ニシテ軍靴、巻脚絆。
5、各伝令ヲ差出シ、□□、徒手、帯剣、巻脚絆。
6、□□兵。

非常

1、命令受領ノタメ所要ノ兵ヲ伴ヒ、（ママ）
2、各銃中隊ハ□□、パン一切（カ）分、警戒兵配置。
3、伝令服務ハ、執銃、帯剣、弾六〇発。
4、他、Ⅱニ伝令差出ス。
5、衛兵所へ兵三。　服装ハ同じ。

（七月十七日カラ二十六日ノ記事ナシ）

七月二十七日

今日は早や、鯖江先発より丸一ヶ月の月日である。早いものである。思ひ返せば全く夢のやうな心持である。待って居た七月十九日も、淋しく満州の野に送ってしまひ、今は新京の一角に警備の任について居る。然し、健康なるが一番の幸福である。

満一ヶ月の月日を迎へて転た感慨無量、故郷の父母様・祖母様始め、可愛いゝ妹や弟は今如何に。彼等の上に幸あれ。再び又楽しく、一家団らんの日の来る事を期して疑はない。

七月二十八日
〃〃〃〃〃
（七月二十八日カラ八月五日ノ記事ナシ）

八月六日

一、連絡兵、応用動作不良。
二、lgノ突作（陸）ノ動作。
三、我カ企図ノ秘トク、一、二名ノタメニ判明。
四、

（写真34）

十二時半新京到着。五日正午諸勤務ノ交替終了。同時ニ新京警備隊ト改称。日直司令鈴木大尉。

五日午前八時ヨリ交替開始。

中隊ハ、軍司令官々邸衛兵音田中尉以下十九名。

部隊　軍司令部　軍司令官官邸　東倉庫　西倉庫

寛城子　無線電信　揚家屯無線電信

演殊事項

1、演習・訓話・警備ヲ完全ニナシ、出勤ニ差支ヘナキ様ニス。
2、警備規定ノ研究、軍司令部・軍参謀長ノ訓示ノ研究。
3、敬礼態度ノ厳正。
4、衛生特ニ胸部疾患ノ予防。

七日正午マデニ全く落着クコト、七日巡視。

三　覚書

＊大連市松林小学校四年生　橋本　寿

＊　員数

毛布　九六　枕　二二　覆　二二　フトン　一一
吸殻入　二　洗面器　六　湯呑　二　茶碗　一〇
湯オケ　二　杓　二　杓子　二　汁々　一
雑巾　一　竹□　一　蓑フトン　二

（ココハ横書キデ、数ハ算用数字）

（写真35）

＊「6、服ム概可、□シ二名。窓、下士官室上、第五班下六分二、上六分ノ一。
5、上六分ノ一開、□シ二名。
3、服ム状態良好ナリ。窓ノ開閉際上ノミ開ク。入口ノ扉閉ヅ。
2、概シテ積極的ナラズ。第四班ノ窓、下六分ノ二、□□室六分ノ一開キ、他ハ閉ヅ。
＊11、前半度ハ開ク、十一時閉ム。脱□者多シ。
10、脱□者多数アリ。
9、□シ八名アルモ□□セス。脱□者多シ。□勤ブリ良シ。窓・扉開。
7、服ム良好、荒井善治他二名。窓六分ノ一開ク、一時半閉」

（「　」内鉛筆書キ）

＊司令　山本上等兵

衛舎係　山形上等兵
歩哨係　伊達上等兵
喇叭　山田　正
表門　江上　嶋　竹内
軍旗　荒川　辻　斎藤
北門　川内　浜内　氏家
弾薬庫　大佐々　能セ　堀川
営倉　藤本　岸下　山田　順
＊赤白　四　赤　二　携帯地雷　全部

（写真36）

（写真37）

＊　軍旗祭費用　初年兵ノ分

1、西沢　2、安本　3、三国　4、小林　5、奥山
6、高橋　7、立壁　8、河崎　9、川野　10、北山
11、増田　12、沢崎　13、白崎　14、松田　15、五十嵐
16、青木

棟朝

（写真38）

（写真39）

＊一班　木下正　川内（南）　清水？

（写真40）

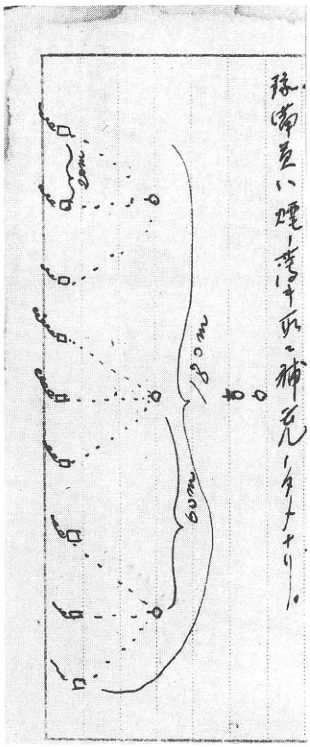
二年兵

1、今晩中ニ軍装ヲ完全。

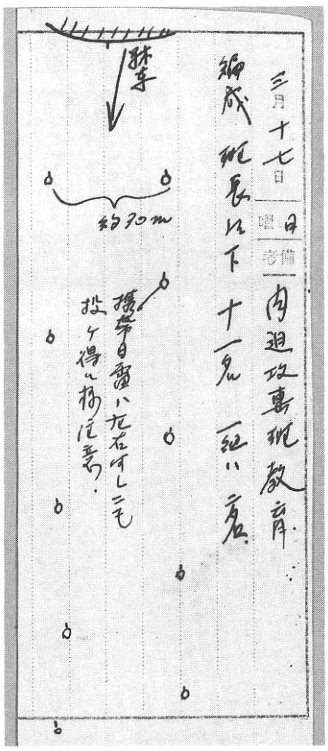
2、各自手榴弾一ヶ宛作製。
3、山田　順・渡辺　詮、擲弾筒〈渡辺ト真〉　午後。
　　午前ハ軍装ノマヽ。
4、（ママ）

（写真41・裏表紙扉）

＊下段以降の写真の文字や絵は、とくに断らない限り万年筆で書かれている。

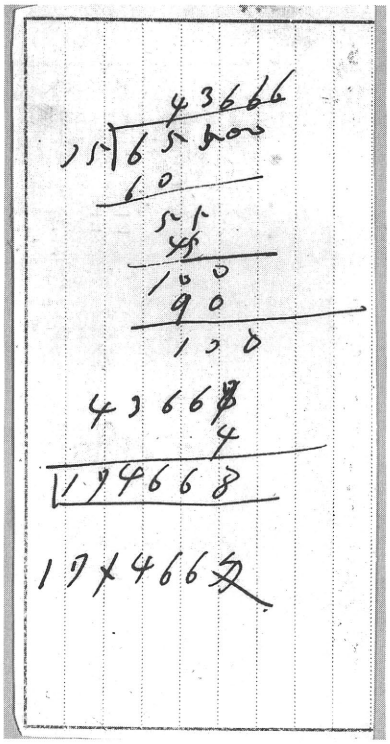


（写真16）

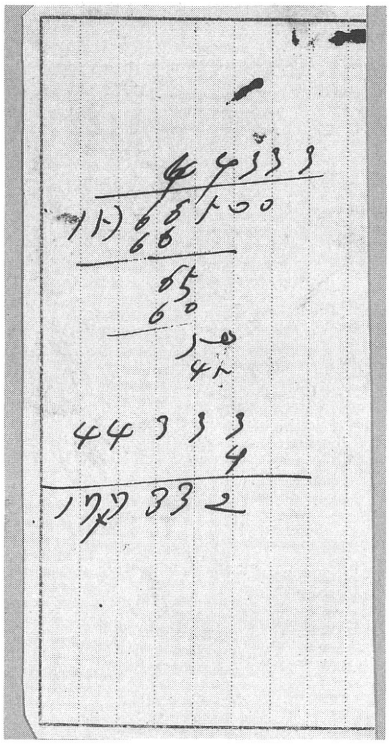


（写真17）

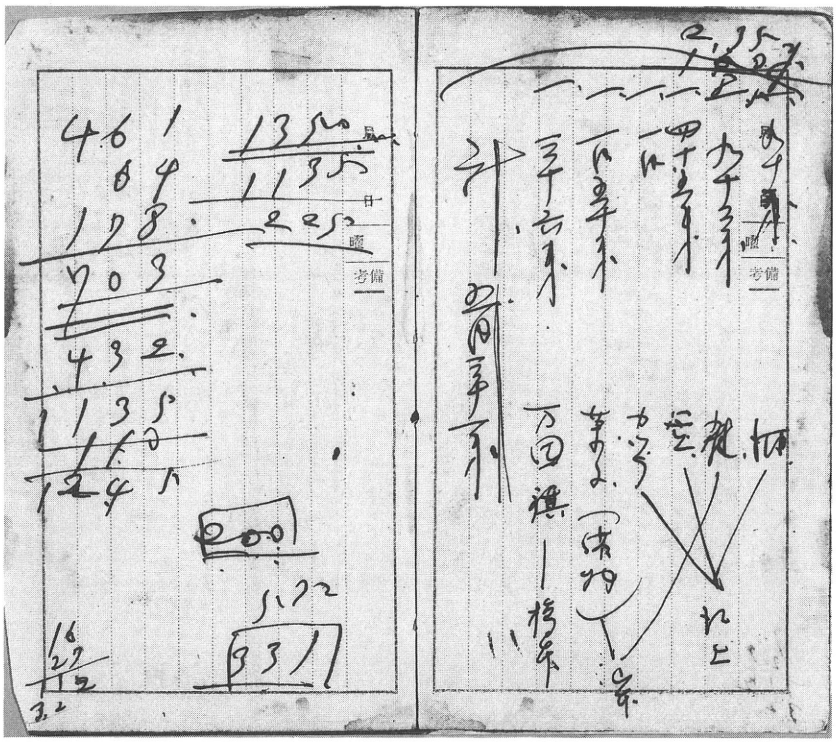
（写真18）



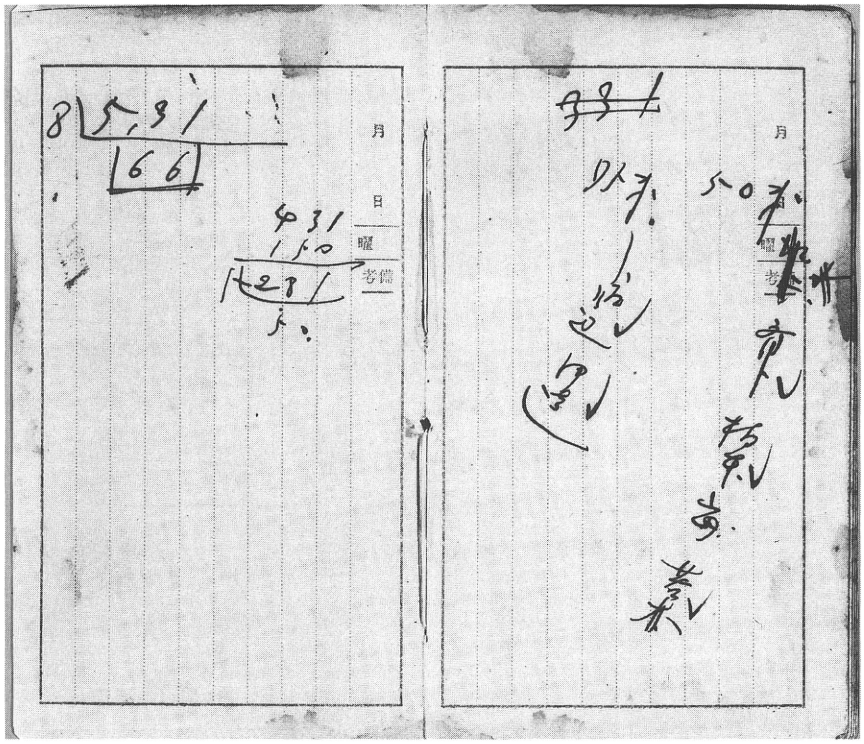
（写真19）



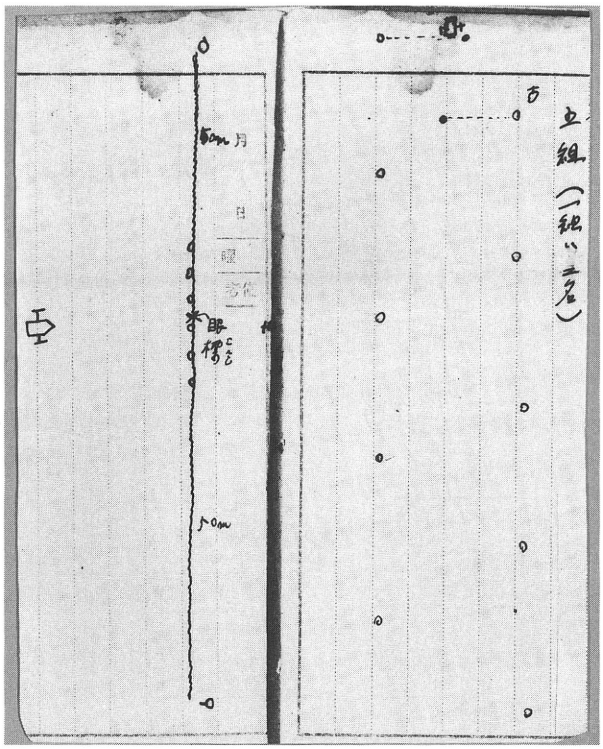
（写真20）



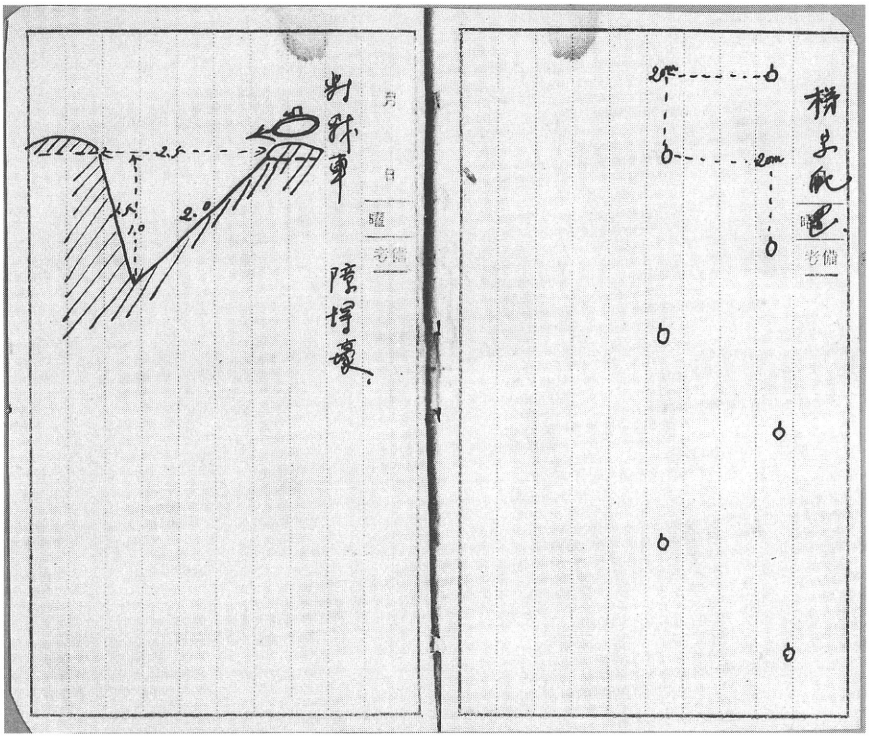
（写真21）



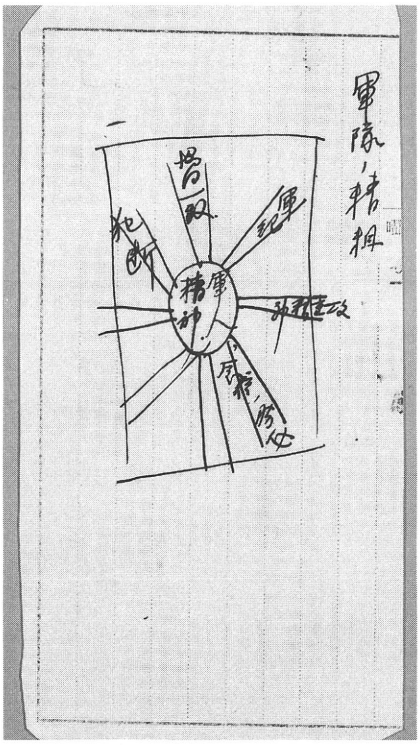
（写真22）



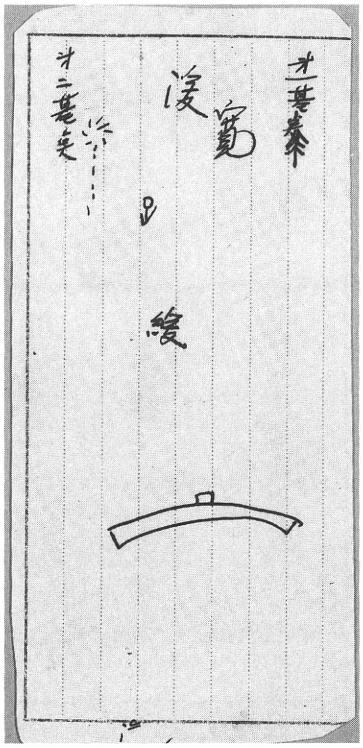
（写真23）



（写真24）

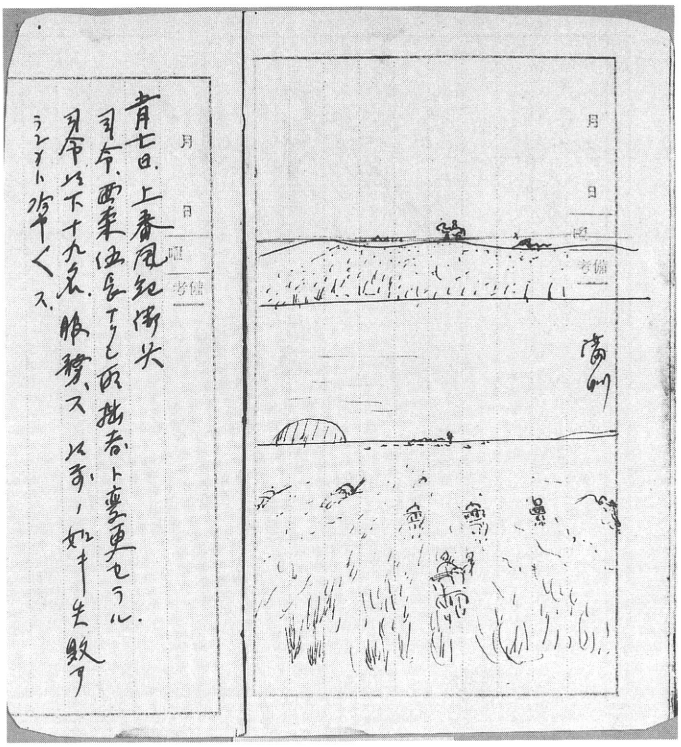


（写真25）

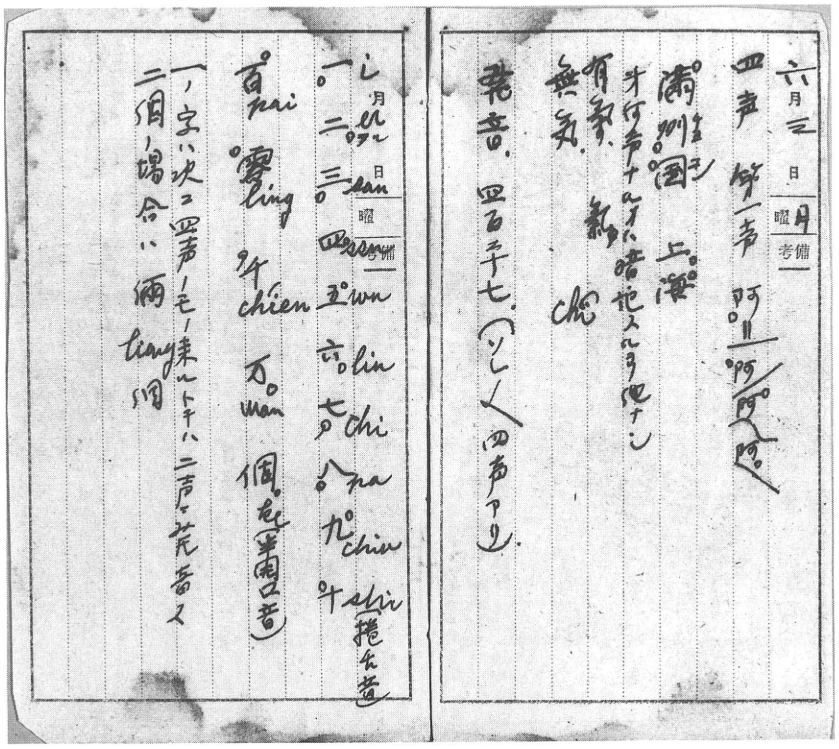


（写真26）

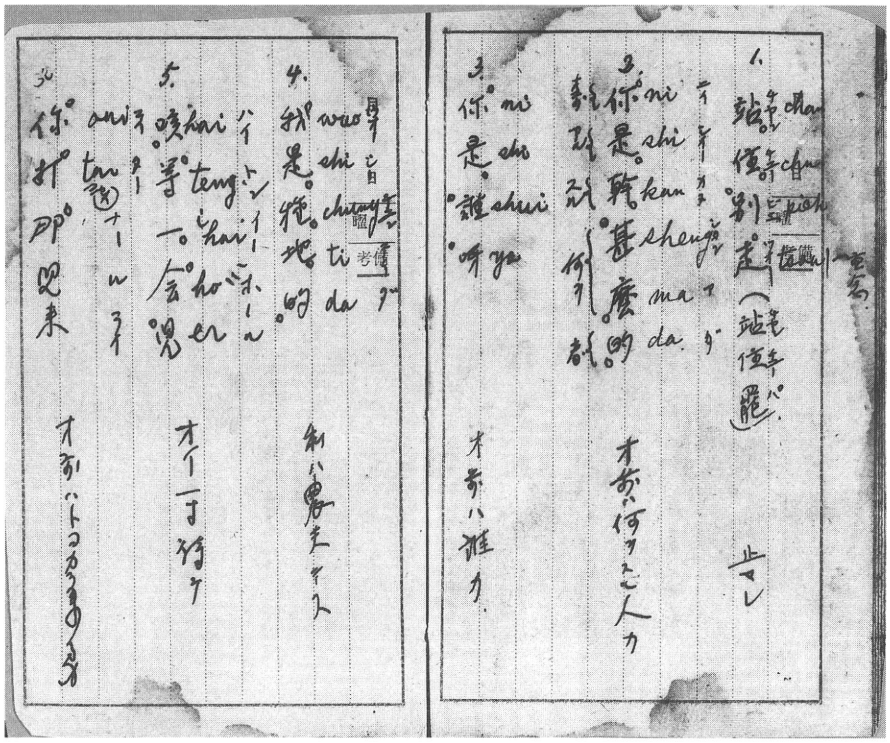
（写真27）



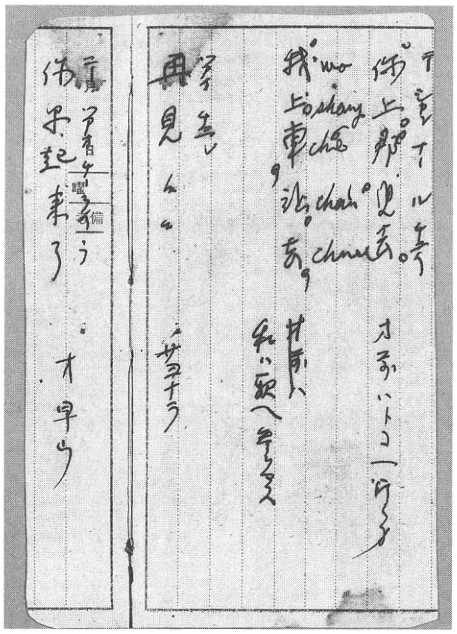
（写真28）



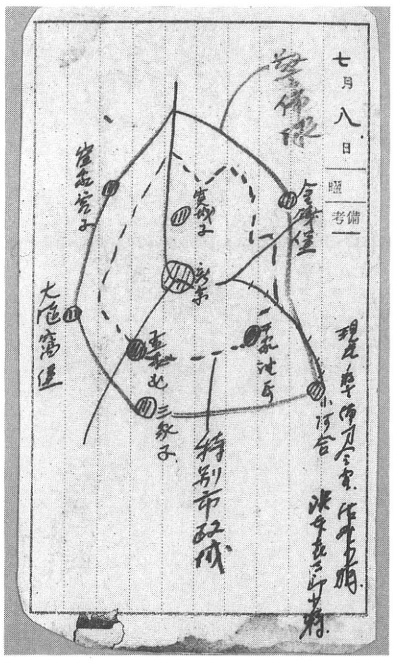
（写真29）



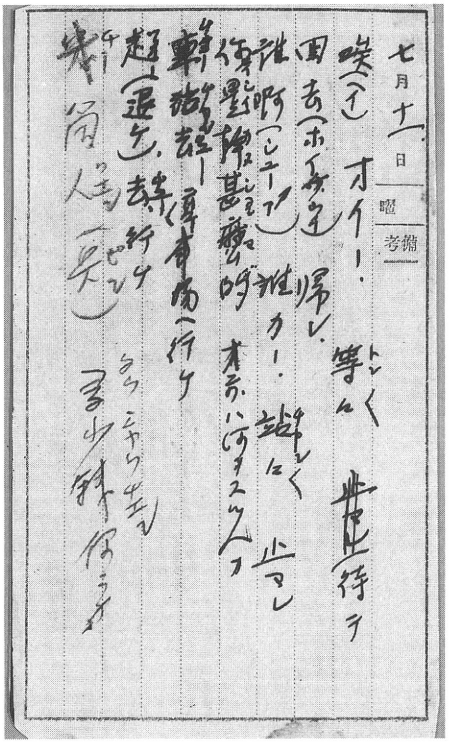
（写真30）



（写真31）



（黒・赤・青鉛筆と万年筆）

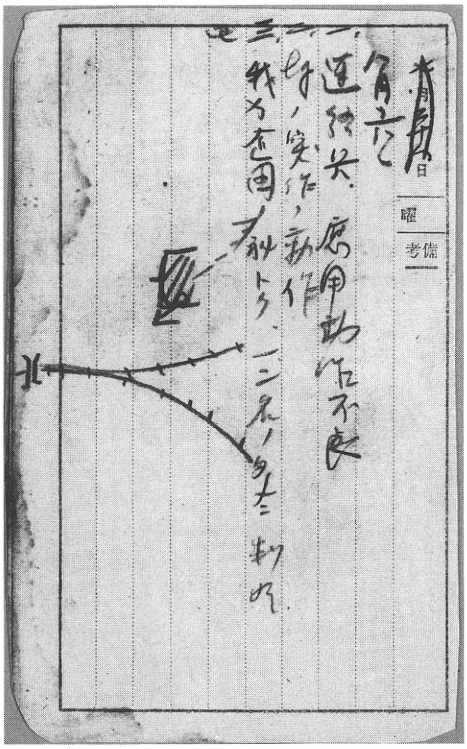


（写真32）

（最後の一行鉛筆）

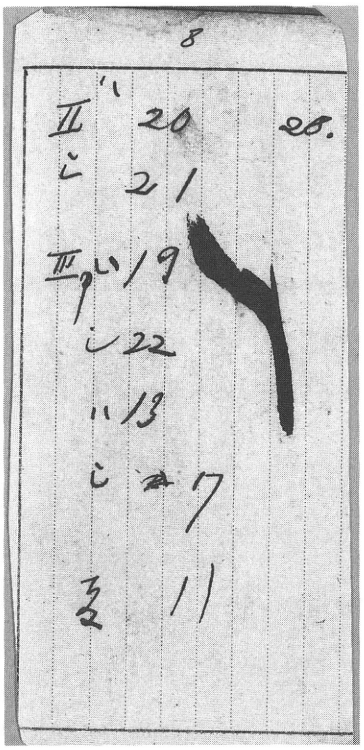
（写真33）

（文字は鉛筆）



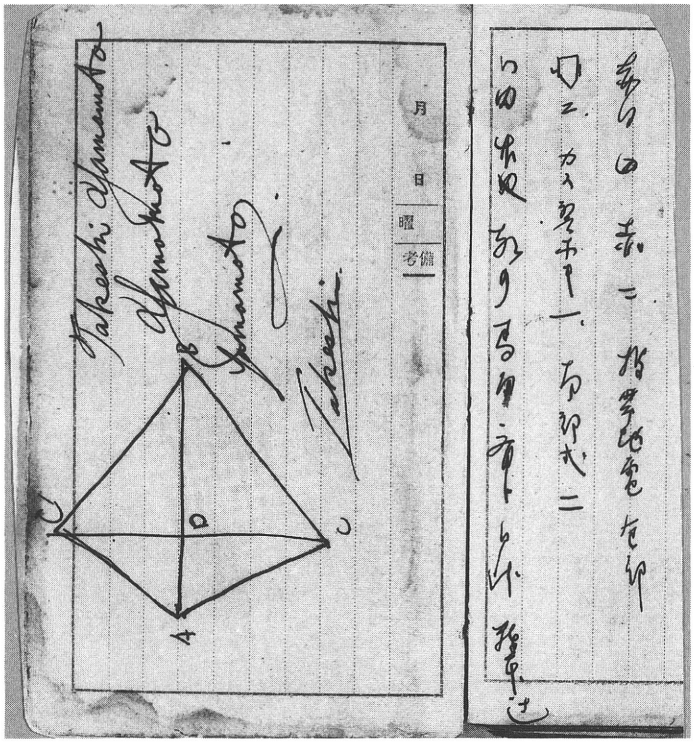
（写真34）

（青・赤鉛筆）

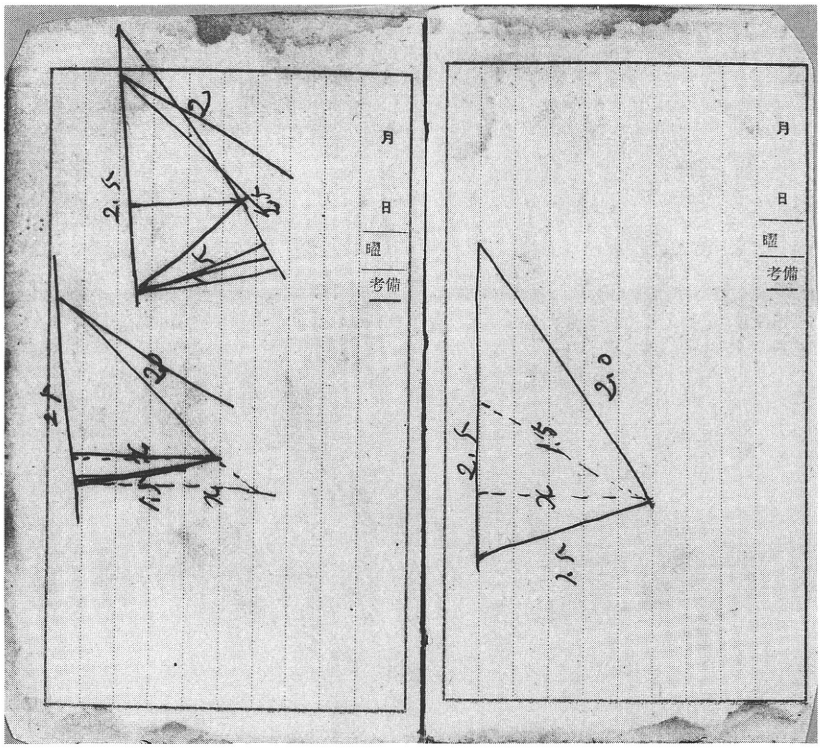


（写真35）

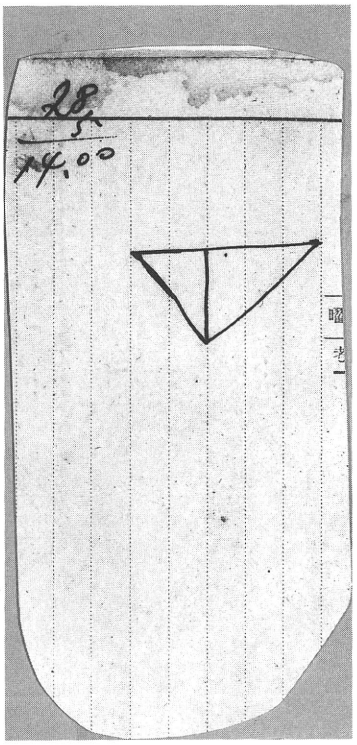
（写真36）


月
日
曜
考備
Takeshi Yamamoto
Yamamoto
Takeshi
A
B
C
D

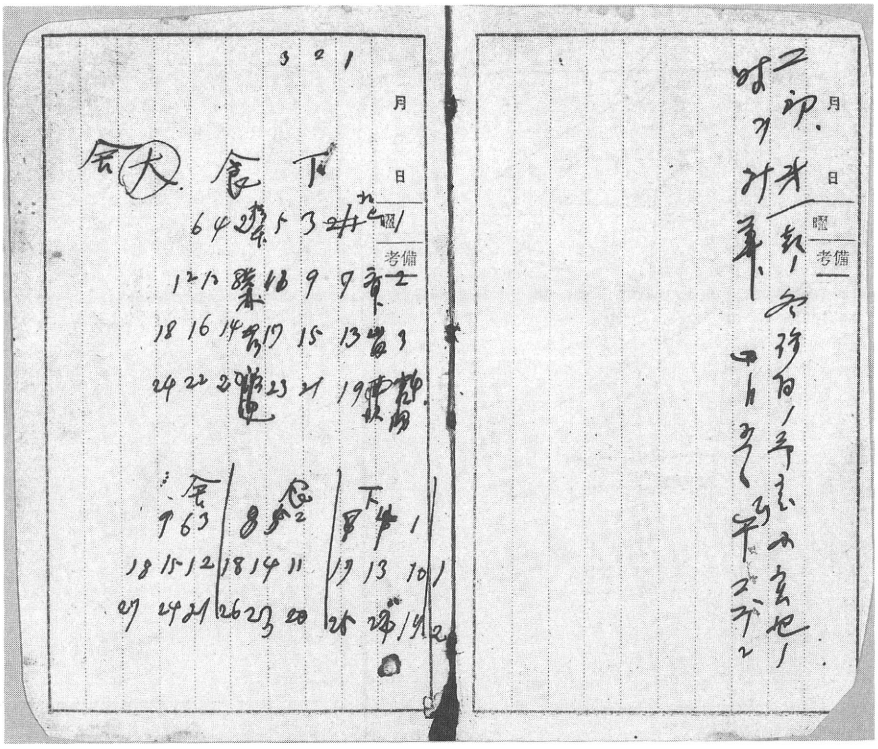
（写真37）

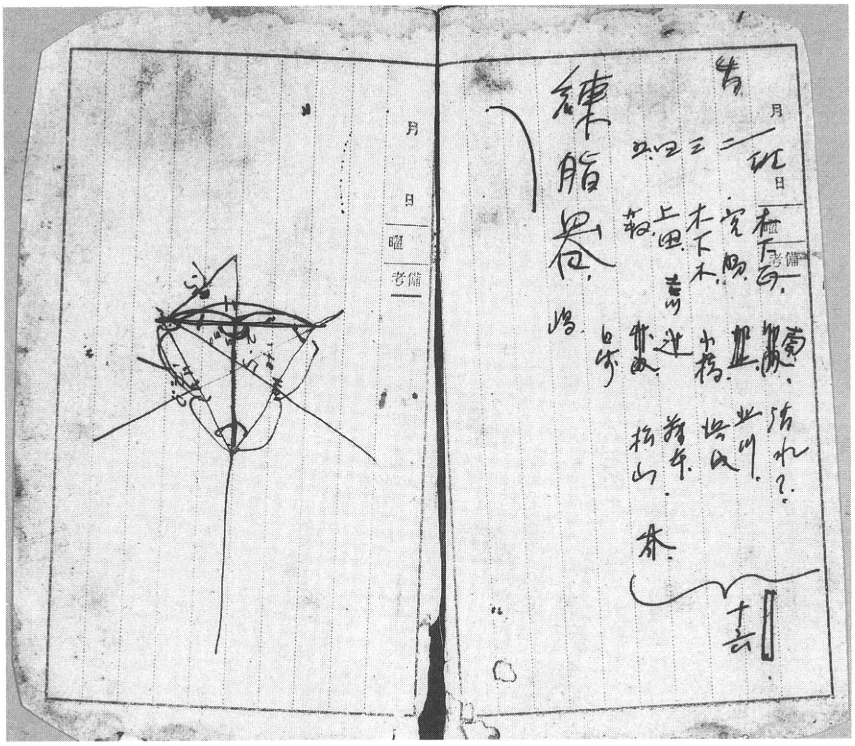

月
日
曜
考備
2.5
2.0
月
日
曜
考備

（写真38）

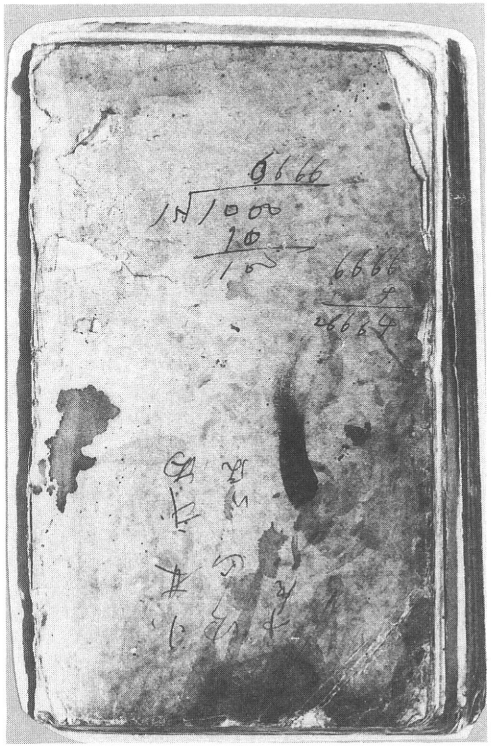


（写真39）





（写真40）



（写真41）

第七冊

一　解題

形態：ごく普通のＡ５版ノート。三一枚。左開き。縦書。すべて万年筆で書かれている。覚書の部分はない。

表紙：横書き（万年筆）で、

「八丈島随想録
満第１２３７８部隊の２
山　本　武　」

とある。

内容：武は、昭和十四年七月召集解除、その八月六日安川ハルエと結婚、翌年八月三日長男富士夫が誕生、ついで二人の子息も生まれた。十八年十一月二十六日（『従軍記録』では二十八日）召集令状が来て、十二月三日敦賀中部六四部隊に入隊、十九年九月八丈島守備隊に転じた。二十年二月十五日条に「八丈防衛の日誌を綴らんとす」とあるので、この日から日記を付け初めたと思われる。したがって冒頭の十一月二十六日付の記事は、十九年に前年のことを思い出して書いたとみられるので、「上」で示した第七冊の開始日は間違っており、訂正しなければならない。この日記は日付が飛んでいるが、三月三十一日の次に「再び筆執るに際して」とあるように、一時行方不明になったことによるらしい。写真はない。

二　日記

一年前を顧みて　　十一月二十六日

今僕の頭には、過ぎ来し一年のさま〳〵の思ひ出が、寂しさと、楽しさと、悲哀と、そして感激とが一杯になってとめどもなく廻っている。懐しく甘い感傷を残して……。今日十一月二十五日、去年の十一月二十六日晴れのお召の命を拝してから丸一年、思ひ出るまゝ暗い電灯の下、遠く故郷のいとしき妻子や、老ひたる父母、可愛ゆき弟妹の如何に居るかと、俤を瞼に描きつゝ筆を走らす。

月はおぼろに中天に在り、昨日の敵来襲も、本日の空襲警報も忘れたる如く、太平洋の波静かに、ほの明るい八丈の島、深き眠りに落ちんとす。

去年の秋、あの頃は多忙だった。ガダルカナル転進以向(降)、敵反攻の手漸く鋭く、相次ぐ悲報に切歯扼腕、マキン、タラワの全員戦死の悲しむべき報導(道)に接したあの頃は、全く一生懸命だった。私は農民だ！　農民道を説き、弱農之弱虫翼壮を率ひ、農事実行組合員を説き、一意麦蒔き、増産、供出にと、老ひたる父母、病弱の妻に苦労かけて、卒先垂範（率）〈自分では真剣にそのつもりにて〉疲れた身体、ひるむ精神に南の空を睨み、戦友を偲び働いた。

十一月二十四日、一年の収穫最後の戦果、籾摺り調整百四十五俵、一家揃ふて此の大増収、反当七俵三斗の大収穫、人知れず誇りと感謝の気持で御馳走を祝った。父の自分に対する満足気な眼差し、

母の喜ばしげな顔、妻の頼もし気に優しく見つめたあの眸、子供達迄賑かだった。農家の夕餉の団欒、平和な家、賑やかな明るい家、私の故郷、心の帰すべき故郷はやはり家だ。家庭にあってよき両親の下、愛児の手を執り、お馬にもなったり、忙しい時に車に乗せて引ぱって見たり、優しい妻の愛情に浸りつゝ暮したあの頃は、何と言っても矢張り幸福の絶頂だった。然し戦争は、決して我々の個人的感情を許さない。刻一刻、戦局は悪化の一途を辿りつゝあった。妻に語ったあの決心。最悪の場合を期しつゝ、如何なる場面に遭遇するも、心落ち着け取り乱すべからず、武人の妻らしく振舞へ、而して全力を奮って最善の道を進め、その日が遂に来た。

十一月二十六日

忘れもしない午後六時、丁度楽く一家打揃って何時ものやうに夕餉の最中だった。あの日妻と二人が、麦苗を盛之君の畠より貰ひ、背中田に植え、午後は母と二人で麦植えをして、来年の春の房々と実った麦畑を夢見つゝ、夕方遅く星を戴き、ソク〳〵と冷い空気が身に浸(染)みるまで働き、母と二人がいとしの子供や妻の待つ我家に辿りつき、温きお湯に入り、まづしい乍らも温き御飯に、心行くまで楽しき気持に浸って頂戴した夕飯。思へばあの日が、あの晩が一番懐しく、一番楽しかった晩餐だった。

「今晩は」笠原君の声も、今から思へば心なしか重苦しく、口こもりつゝ取出した赤き紙。ハッと思ひつゝも、落ち着いて〳〵と心に言ひきかせ乍ら、「御苦労様でした」と受領書に印を捺し、冗談の一つも言いつゝ笠原君を送り、ハッと我に還り、母の驚いたる姿、年取りたる母、小心の母、無理もない、驚きに身をふるわせて居る。妻は……、一番心配して居たはるゑが少しも取乱しもせず、静かに笠原君を送り出したるを見て何よりホッとする。怪げんさうに我々の姿を見つめて居た富士夫が、眠むそうな顔をし「父ちゃん何あに」と聞く。いぢらしさ、可愛いさ、「父ちゃんはね、兵隊さんに征くのだよ」「坊も父ちゃんが居なくても大きくなるのだよ」と言へば、「直ぐ帰るの」と聞く。あゝ可愛い富士夫よ、「うん、直き帰るよ」と言ひつゝ頭を撫でる。感無量。

浩は親達の騒ぎも驚きも知らぬ気に、相変らず母にむづかって居る。父は寺の集会だ。自転車を駈って寺に行く。「うん、直ぐ帰るよ、俺も又頑張るから ナ、まあ心配要らぬよ」と頼母しく肯く。父、よき父。九平・弥三郎・儀大夫通知する。皆驚き悲しむ。悲しむなかれ、武士の本懐、晴れの門出を。

一家語り合ひ時の経つのも忘れる。母が妻が今までの苦労を謝し、今暫く楽をさせてやりたかったと悲しげに言ふ。何時まで語っても果がない。明日出発するわけぢゃなし、まだ日数もある。皆床に入る。わけもなく無邪気にゴロリと寝て居る可愛いゝ富士夫、「父ちゃん〳〵」と後をついて歩いた富士夫、ぢっと見つめれば悲しさ込み上げる。父ちゃん居なくても大きくなれよ、又会ふ日は何時か。妻の目にも心なしか一杯涙が溢れて居た。

涙は不吉ぞ！　口には強く言へど、弱き身体で一割(ママ)夫思ひの、夫

頼りの、心弱きはるゑの行末、気持を思へば可愛いさ一入。ヒシと抱き締め、心配するな、俺は必ず又立派に手柄を立てゝ帰るよ、身体を大切にして待って居てねと言へば、よゝと顔を埋めて涙にむせぶ小さき肩。あゝいとしさ、可愛いさ、涙にうるんだ優しき眸を目上げて、求むるが如く唇寄せ来る妻よ。幸福と脳（悩）ましさ、銃執る身に未練だと思へど引かるゝ心、果してひきょうなるか。あゝ此の気持、幾千万のつはもの達、同じ思ひの惜しき別れを遂げた事ならん。夜は更ける。今日も何事もなかった様に十一月二十六日は過ぎて行く。

一月十五日　雨

降り続く雨、篠つくやうなトタン屋根を叩く音、築城週間に入ってからの雨にはほと〳〵困じ果て、報告し来る作業状況は、岩盤又岩盤、真黒暗（ママ）の雨の中に、泥に塗れて十字鍬を振ふ兵隊の姿が眼先につら（ちカ）つく。（ママ）時情報来る。敵の有力なる機動部隊は、マリアナ基地を出撃せりと。又曰く、大本営発表、比島マニラ市の彼我攻防戦は、大東亜戦以来の最激戦を展開中なり。マニラは猛火に包まる等々。あゝ比島の運命は……、一億国民神かけて必勝を祈る。比島は刻々鬼畜米軍のために侵かされて行く。弟の安否は既に知る由もなし。不憫なる弟よ、立派に軍人の本分を……と、人知れず涙にくれるのみ。

思えば三年前の今日は、かのシンガポール陥落の目出度き日であった。猛将山下将軍ト敵の敗残の将パーシバルの会見、無条件降伏、万歳の声は津々浦々に轟き亘り、第一次祝賀会、あの感激の絶頂、今比島の将軍の胸中を却（去）来するものは。英雄の心境を察し転涙を禁じ得ず。

マリアナの敵機動部隊何処に向ふや。来らば来れ、我等が鉄壁八丈へ。死出の旅路こそ笑止千万。

戦機将に熟す。八丈の空にも戦雲低く垂れこめて、決戦決闘、敵邀撃の機は時々刻々迫り来ることが、ヒシ〳〵と六感に伝はり来る。

死中に活を求めて弾丸雨注の間を戦ひ抜き、砲弾の下、小銃弾の下に、突撃の寸前に、敵兵を突き殺した直後に、或は行軍の途路、或は楽しき陣中の晩餐の後に認めた、あの支那事変当時日記が何だか思ひ出され、又あの頃のやうな状況が来る、否もっと〳〵悽愴なる場面が来る。思ひのまゝを気の向くまゝにまかせて、八丈防衛の日誌を綴らんとす。幸いにして日誌を認める程の事件、変化なき戦局の推移、いな皇軍大勝利の快ニュースの連続に酔って、筆執る期を忘れん事を祈りつゝ。

雨尚止まず。泥人形のやうになって寒さにふるゑつゝ、倉本・友

横川作業より帰る。

二月十六日　雨

昨夜半来る情報。敵の有力なる機動部隊は硫黄島に向ひつゝあり、上陸を企図しある模様なり。明朝八丈島にも空襲必至、若し直行せば〇八〇〇頃には八丈に来ると。

情報虚ならず。果せる哉、起床、朝食も済むや済まずや空襲警報

発令。
爆音、友軍機かと思ひ、上田伍長と共に飛び行く飛行機を眺め居ればば、八時、轟然爆弾投下、大賀郷・三根方面は暫し彼我の砲弾声殷々と、今にも我頭上に爆弾窄(炸)裂するかと心落ち着け居れど、不安の色戦友皆同じ。八時二十分漸く敵機退散す。
初空襲、敵はグラマンF4号十六機とか。八重根港の船団は、八隻の内一隻炎上、撃沈され、三根小学校に直近弾落下とか。或はデマならんも、死者七名、残る船も相当の損害を被りたり。我高角砲一破壊さる。敵は伝単を散布した等々。
雨の中、待(ママ)避壕中に戦局の悲況を歎じながら過す。時間の長サ。
午後又空襲、空襲。
硫黄島は如何に。
午後十時、一日の出来事を語り合ひつゝ夢路に入らんとする時、又空襲。不気味な敵の爆音、寒い真闇の待避壕。語るは故郷の空を、帝国の前進を、八丈の運命を。
空襲警報解除、寝る間もなく来る敵機動部隊の状況、報(ママ)情。
再び鳴る空襲のサイレン。
一月十七日　晴
のろはしき夜は明ける。大隊命令により、武器弾薬の陣地搬入が始まる。
装具の搬入、糧秣の受領、戦斗は既に開始された。時々来る敵機、忙しげに働く兵、部隊の陣地配備による村民たちの不安気な様相。
然し連日の雨漸く晴れ、温い春の日差しに大地も人も甦った様だ。
硫黄島の戦況又有利なるか。敵機の襲撃も漸く減少、午後は全く皆無となる。あゝ皇軍に幸あれ。
祈る事真に切なり。
昨日の疲れ一時に出たるか、熟睡、何も知らず。故郷の平和な風景を夢みる。
二月十八日　晴
麗らかな春の日和、敵機も来らず、続々入る敵機動部隊撃滅の快報導。皆今日は笑顔になって、元気に山の陣地に弾薬を運び、糧秣を運び行く。
空は青空、八丈には珍しい快晴。
今井曹長昼過ぎ第三小隊に上り、指揮班は中隊長・池上曹長と俺とのみ、榎少尉此方に泊る事になる。
晩、金打氏の家で御馳走になる。
のどかな日よ、何時までもと祈る。
二月十九日　晴
今日も又明るい日、硫黄島の戦況も好転して居るか。午後空襲警報発令さるも、敵機を見ず。
大隊命令追加出で、中隊は明日再び下山せよとの中隊命令。池上曹長陣地構築に行き午後帰る。中隊指揮班陣地も仲々状況良しの由、大喜びなり。
春は近づきつゝあり、戦勝の春又来るを祈る。去年の今日は、始めて故郷に帰省した日だ。楽しかりし思ひ出は尽きぬ。
両親始め皆々達者か。此の頃便り少しも来ない。

一月二十日　晴

〇九〇〇、八丈東方に空母五、戦艦二北進中の情報を受領。尚又兵団情報によれば、硫黄島に敵約七〇〇〇、戦車一五〇輌上陸の悲報、硫黄島上空は常時敵艦載機二、三〇〇を以て爆撃中とか、敵機動部隊は硫黄島周辺に遊弋中の情況、正に悲劇の極。あゝ我艦隊は、我飛行機はと叫ばざるを得ず。空襲警報発令、村人の顔色なく、只黙々として壕の補強に専念するのみ。

中隊又一旦下山の命令を昨日出せしも、再び陣地内にて起居、構築設備に専念する如く命令を変更す。

各小隊は毎日山を登り降り居り、疲れ切って居る。食事は一日三合給養とか、皆腹が空って仕方がない。野あざみ・つはぶき等の雑炊が大流行だ。

一月二十一日　曇

硫黄島の戦況は依然熾烈を極め、Fの攻撃益々猛烈の様子。朝点呼報告に行き、先第一に大本営発表を写す。各小隊連絡兵又皆々戦況が気がゝりか、報導を写し取って帰る。夕方、我神風特攻隊大編隊を以て、硫黄島爆撃に赴く。成功を祈ると共に、若き荒鷲共の無事を祈って止まない。

一月二十二日　雨

珍しい東風が吹く。暖い風、春来るか。間もなく降り来る大豪雨、八丈島らしく降りしきる雨の音、トタン板を打ち破るかとばかり物凄く降る雨。増谷君が昨日来居る。黒白の手習拍子面白し。仲々上達しないものだ。ルーズベルトが来る迄に、せめて半人前位になりたいナーなんて、冗談を言ひ乍ら雨は降り続く。

二月二十三日　晴

昨日の雨はカラリと晴れて、又相も変らぬ西の風が吹きつのる。然し、めっきり此頃は暖くなった。朝の温度が八度。

又俸給日が来た。経理室へ金を受取りに行く。炊事の横で奇麗な声でうぐひすが鳴く。八丈で始めてのうぐひすだ。

鶯の声を聞くと様々な思ひ出が湧いて来る。

除州（徐）戦には麦畑を前進すると、何処からともなくホーホケキョと奇麗な声がして、疲れた身体も忘れてその声に聞き惚れたものだった。後には朝の行軍の始めに、右か左かで、右だと今日は敵に遇ふ、左だと大丈夫だ等と、鶯でうならひ（ママ）を（占）立てゝ前進したものだった。思へば苦しい戦争だったが、あの頃は愉快だった。朝に一城を抜き、夕に一塞を陥る、実に皇軍の向ふ所破竹の進撃振りだった。又あの頃は物資も豊富だった。故郷の心配、況んや皇国の勝負など考へる必要もなかった。只一途に己の任務に進めばよかった。思へば懐しい支那事変。

鶯の声を聞くと又故郷を想ふ。家の前の源蔵の倉の横の梅の木に、よく止って鳴いて居た子供の頃。鶯はやはり梅が好きだなー等、感心した様な顔をして、鳴声を聞いて居た事もあった。

三月、四月、梅がほころび、桜が咲き始むる頃は、よく晴天無風、実にのんびりした天気がよくあるものだ。死んだおばあさんが、台所の南縁側で日当りをしながら、ナムメウ（南無妙）……と唱へて座って居る。

子供が小さな網を持って、魚を捕へるのだと言って、沖田を飛び廻って居る。母や妻は洗濯は此の時と、楽しげに洗ひ物をする。父は（ママ）

二月二十四日　晴天

何時も乍ら日誌に向へば直ぐ過去を思ふ。特に一年前の今日は等と、懐しく思ひ出が走るものだ。

例によって今日は、守君の召解の日だった。雪の敦賀の二中隊の見士室に、比島帰りの身体を寒さにふるはせ乍ら、毛布に丸くなって居た守君や室谷君・岩佐君を送り出す為めに、送別会をやって下士官室で大いに飲んだのも昨夜だった。今日朝早く本部前に送って別れたが、其の後如（何脱カ）うして居るやら、武昌から懐しい便りを貰ったのが終りだった。守君は千島の果にどうして居るやら。酷寒の地に変化なき生活、吹雪の中を眺めて無為に暮す彼の姿が目に浮ぶ。故郷の空を思ひ、友を想ふ。果して戦地でこんな事を思ひ出すのが未練か。子供も大きくなった由、一度見たいと思ふのが女々しい事だらうか。

大君に捧げ奉った此の身体、宿敵米鬼を粉砕せんと誓ふ矢先に、又脳裡に浮ぶ愛しの妻や子供の姿、只只幸多かれと祈るのみ。

夜、池上曹長と二人、和田氏の招待に預り、牛肉のスキ焼でうんと御馳走になる。お酒に酔った和田さん、召集が来るとか……。

五月二十五日　雨天

どんより曇った空だと思う間もなく、降り出す雨、雨。八丈名物の雨が降る。

命令受領に行って帰れば早速空襲だ。憎っき（く脱）F、グラマンF4七機悠々たり。飛行場爆撃。

午後又来る敵機。炸裂する爆弾の音。友軍の砲弾、機関砲の音。□の隊長室に落下せしとか。戦闘は身近なり。築城は又いよ〳〵急なり。

不可能を可能ならしめざるべからず。やらねば全員戦死あるのみ。物量のなき国はかくもみじめなものか。硫黄島奮戦中とは言ひ乍ら悪戦苦斗、同情に余りあり。

比島の重雄も今ではもう生きては居るまい。写真を眺めれば俤身近に迫り、只可愛いさに胸一ぱいになる。あゝ不運なる弟よ、何か奇跡的に素晴しい勝利の道はないか。

天を仰ぎ地に伏して神明に祈る。

二月二十六日　曇後晴

昨今めっきり春めいて来たのを感ずる。鶯の声に、柔らかい春風に、のどかな故郷の春景色を想ひ出す。

然し此の春を他所に、世界到る処になまぐさい戦が展げられ、血風荒び、阿鼻叫喚の修羅が巻き返して居るのだ。此の間までは平和そのものゝ中の郷にも、春をも知らず不気味な空気が垂れ込めて、村民達は不安と焦慮にあせって居る。隣の和田氏も召集との由、国民皆兵、国を護るは内地も島も差別なく、皆第一線へ〳〵に駈り出されて行く。

昨日の爆撃では、三原隊の曹長が一名、退避壕の入口で、不幸砲弾の破片により戦死せしとか。無常の風は容赦なく吹き荒んで居

る。

春来りなば、花咲き、鳥は歌ふ。かげらう燃へて野は晴れ渡る。口を揃へて歌を歌ったあの子供の頃、懐しく思ふと共に、日本の春、日本勝利の大らかなる春こそ、十億国民、否世界民族皆手を執り、足を揃へて踊り狂ふ世界の春なのだ。その日を迎へんが為めには、いざ〳〵奮斗あるのみ、弱音を吐く勿れ。勝利！　勝利への一本の道あるのみ。

九〇〇より、今度の硫黄島の戦訓に基く、陣地構築対策に対する打合せ、各小隊長集合す。

一三〇〇より、中隊長殿と二人、大隊予備陣地巡視に赴く。今日は作業を休んで居る。岩盤のため作業進捗せざるは実に遺憾なり。

（二十七日ノ記事ナシ）

一月二十八日　晴

猫の目のやうに変る陣地構築、あれもやりたい、此れも是非やらねばならぬ作業である事は無理はない。然し、此んなに変っては、一つも完成しない中に次の仕事に手をつけるに到る。

昨日の命令により、明日からは戦車壕構築だ。陣地の宿営も昨日を以て終り、今日は下山命令。中隊長及各小隊長と俺と現地監察に行く。第一小隊右側が水に対して薄弱だ。それにも増して第二小隊正面が弱い。結局第二小隊正面に、大戦車壕に連繋して構築する事に決定す。帰りは一七時半、お腹がペヤ（チ脱）ンコだった。

昨夜は和田さんの応召送別会を、お酒持参で指揮班で開催、すっかり酔ひぱ（ママ）らひ困った。

航空便による便り来る。昨日は天谷君から葉書一本のみ。若干淋しかったが、今日はさだえと清子さん・青西君・日深師から便り来る。清子さんの便りには全く泣かされた。ほんとに弟は比島でどうして居るやら、思へば夜も眠れぬ。弟夫婦の、雛様のやうな奇麗な姿が思ひ出される。可愛いゝ弟よ、是非とも達者で居てくれ。

妹の便りも同じ事。あゝ幸福なりし兄弟も、重雄一人最も苦労させる。過ぎにし夢のやうな、賑やかな岡野の家が思はれる。何時訪れるや。

三月一日　雨

五時起床、六時整列、六時半作業開始と、此処にも激戦が展開されて居る。一日三合給養、お腹が空く。不平は言へない。然し苦痛は事実だ。

硫黄島を偲び、比島の弟の事を思ふ。我身を顧みる、まだ〳〵努力が足りない。此んな事を思ふのみにても、罰があたると言ふものだ。果して木の芽、草の根を、何回食べた事があるか。お酒に酔った事はある。すき焼を腹一杯食べた事はある。然し、腹が空って仆れた事は一度もないではないか。修養が足らない。我慢がない。俺は帝国の軍人であり、兵の模範となるべき下士官なのだ。もっと〳〵強い身体と意志の持主とならねば駄目だ。Fは何れ必ず八丈へも来るに異（ママ）ひない。その時にこそ貯え来った底力、不屈不撓の精神力を以て、Fを仆すべきだ。そこにのみ自己の生きた生命を見出し得ると思ふ。

三月二日　豪雨

珍しい南風が吹く。硫黄島の戦場を吹き捲って来た、血なまぐさい風だ。暴風雨の中に、敵の矢玉と戦ふ戦友を偲ぶ。

今日は嬉しい故郷の便り。葉書一本でも愛しいはるゑの便りは、何とも言へぬうれしい気持がする。下手ながら一心に綴ったペンの後(跡)、彼女の香りがするやうだ。旧正月藪入りには、妹や清子さん等大勢に孫共を交へて、ぜんざい・いか・牛肉等、さゝやかな平井料理にての御馳走だった由。平和な時であったら、河端の兄も弟も俺も皆んな揃って、どんなに楽しいだらうにとも思ふ。細井中尉が帰って来た。故郷では細井様に面会して、くわしい話も聞いて嬉しかった由。八丈島に居ると知って驚いて居る事だらう。信雄からの便りも仲々面白い。富士夫のスキーが見たい。ころんでばかり居る事だらう。モンペをはくのがいやだと言ふそうな、可愛いゝ面白い子だ。浩のスキーは傑作だらう。

晩、大沢氏より出征に際してのお酒と肉を戴く。御馳走をして食べる。

三月三日　雨後晴

昨日来引続いて細井中尉を訪ねるが、多忙なるか留守にて会へず残念だった。今朝早く尋ねる。三回目にやっとお会ひして、故郷の話等いろ〳〵伺ふ。はるゑが富士夫を連れて伺ったる由、「山本の奥さん、仲々奇麗だわ」なんて冷かされて、何だかくすぐったいやうだが、成るべく美しく見て見(衍)て貰ひたいと思って、気取って行った家内の俤を思ふ。富士夫も仲々大きくなり、元気な様子。おみやげのするめを戴く。愛の手紙？　も入れてある。故郷の香りがする。雪の中に埋れた故郷の景色、滑る雪道を辿り行く母子の姿、去年の休暇の時に鯖江で別れて行った二人の姿が、今も尚胸に焼きついて居る。細井様よりくわしく話を聞いて驚いた事だらう。島から島へ渡って居るなんて思って居たのが、八丈島での警備と聞いて安心すると共に、現在の戦局、八丈に二百キ(機)来襲等を報道されては、又心配の種だ。

何れにせよどんなに喜んだ事だらう。

朝来の雨も止み、和やかな春の光にうぐひすが唱ふ。朗らかな日よ。

□□のするめで、晩はお酒もあり、御馳走になる。

（四日ノ記事ヲ欠ク）

三月五日　曇

大隊長殿のK陣地巡視は、昨日の雨で取り止め、今日実施さる。戦壕■を案内し、急襲拠点を案内する。岡など暑くて汗だくだくになる。帰ってから新聞を読む。深刻なる様相、帝都の状況、実に憂ふべき日本の現状だ。本土の防衛、本土の決戦場化、戦争は何処まで伸展するやら。八丈防衛完遂を期して帝都を護り、本土を守護すべきは今だ。

夕食は御馳走して会食をなす。

（六日カラ八日マデノ記事ナシ）

三月九日　曇

八丈島来着してより七ケ月。島人の生活、島の人情・風俗、島の

気候・風土、共に我々には珍しく、又奇異な点を沢山発見する。平和な時は代だったら、どんなにのんびりした所かとも思ふ。島人の好意・親切にも全く感心するのみ。自己に引き較べ島の人々を考へる。

然し一面、又不思議な位個人主義的な、没国家的な性質を発見する。所謂島人根性か。

昨日より今日にかけての、日暮氏の宿舎問題の如きもその一例だ。三根村から中ノ郷に疎開をする軍隊の入舎せる家に、強引に開放を要求するが如き、全く非常識も甚しいと言ふものだ。然し日暮氏も、最後には判り謝罪に来り、円満解決したのは洵に結構ではあったが、戦局を眺める時、例ひ日暮の妻が言はせるにせよ残念な事だ。又今日の里芋一貫三円五十銭の如きも、実に浅間しい島人だ。憐れな人々よ。

島の疎開問題、到る処大問題になって居る。大勢の子供を抱へ、未知の処へ行く。祖先伝来の土地・家・財産を捨てゝ、不自由な土地へ行く。決心のつき兼ねるのも無理はない。然し、今こそ岐路に立って居る。国家が勝敗の岐路に立って居ると共に、島人は人生の最後の岐路に立って居る。同情しつゝ彼等の決心を祈る。

二月十日（ママ）

今日は陸軍記念日なり。去年は陸軍記念日の分列式を行った。現役時代には、鯖江や武生・福井等へ行って模擬戦を行ひ、御馳走を戴いて全く楽しかった。こんな事を戦友と語り合ふ。今日は特別の行事なし。只教育隊に於て、勝見中尉の「要注意者に対する指導要領に就て」と題する講話あり、後大隊長殿より陣地構築に関するお話があった。

晩はお酒が上り、少々とは言ひ乍ら皆朗らかになり、平素謹厳そのものの如き池上曹長が、稀（ママ）しくも奥さんのおのろけで、皆んなをワッと笑はせる。戦地にて、兄弟以上の親しみと信頼を寄する兵隊共の語るエピソード、ローマンス、脳（ママ）み、冗談、総べてが皆切実なる心の底から出た言葉であり、味のある話である。誰しも皆面白い体験を持ち、ローマンスを持ち、脳みも抱いて居る。和やかに陸軍記念日の夜が更ける。警報も出ない。

（十一日ノ記事ハナイ）

三月十二日　晴

麗らかな春日和、今日は農耕作業だ。久しぶりに持つ鍬、土の香り、懐しいものだ。平素耕作の機会があっても、鍬を持たうとしなかったが、やはり土を起し、整地をして見ると、無限の愛着が湧き出づるものだ。里芋畑・五月芋畑を打ち起すと、掘り残されたお芋がコロ〳〵出て来る。皆んな嬉しがって一生懸命に掘り起し、各小隊は小隊毎、指キ班は指揮班でザルに入れて喜ぶ。丁度子供の芋掘りのやうな賑やかさである。

でも帰りには、約三、四貫目の芋がたまった。凱歌を上げて帰る。和田氏の畑を借りる約束をして、早速池上曹長・増谷軍曹と三人にて、甘藍畑の耕起にかゝり、一汗かいて全く気持よい。和田君が内地へ疎開するとの話にて感心する。お昼は和田君を宅にて御馳走になり、午後は休養、大変な上機嫌になる。

（十三・十四日ノ記事モナイ）

三月十五日　晴

昨日便りが届いたのに、自分のは一本もなく若干悲感(観)した。便りの来ない寂しさを味はって、福本君に対する同情も、何だか自分の事に引合せて見た。

今日本部から帰りに、今井曹長がまぎれ込んで居たと言って、父からの便りを持ち帰って下さる。父の便りは又格別だ。家の事、村の事、配給の事、物価の事、あらゆる故郷の姿、家の有様を書いて下さる、全く感謝の他はない。好物のお酒を、お正月には戴いたそうにて、お酒の事が第一番に書いてある。全く良い父だ。麦の増収第一等、ヒマの一等と優秀なる我が家。細井さんから聞いた島の状況に嘸安心した事だらう。富士夫始め浩や英雄の大きくなった事を細々書いてある。今日一日全く楽しかった。

（十六日カラ二十二日ノ記事モナイ）

三月二十三日

今日は浩の誕生日だ。満三才。昨夜来そんな事を考へ乍ら、心の底から祝ってやった。家でもきっと、子供の好きな甘い物とてない時期乍ら、温い御飯にお魚の一匹も買って、太った浩ちゃんを眺めて喜び乍ら祝った事だらう。

あの子も全く赤子の時は可愛そうだった。英夫(ママ)が直ぐ妊っておっぱいも充分飲めず、又一倍やんちゃな勝気な性質とて、泣き出したら止まず、自分もはるゑも何時も泣かされた。病気はするし、肥立ち上らぬかとも思った事も二度、三度。然し、母の慈愛、祖母のお守のお蔭で大きくなり、此頃では丸々太って富士夫に負けぬ重みがあるとか、どんなに可愛ゆくなった事だらう。見たい会ひたいは人の情、出来ぬ事乍ら一目会って、あの口重い口で「父ちゃん」と呼ばれて見たい。大きくなれよ、兄弟力を合せて、仲良く母を助けて、父が居らずとも、素直な良い人に生長(ママ)せよ。

世は正に戦火地上を覆ひ、老ひも若きも、幼な子も戦ひに懸命、苦労の連続だ。然し、必ず〳〵お前達の生人(ママ)する頃には、再び平和な光が訪れる事だらう。立派になれ、浩、富士夫、英夫、皆可愛い我が子、父は祈る。

新聞を読みて想ふ

今日届いた新聞、陣中に於て最も知りたい内地の現状、もうたった二頁になってしまった新聞をむさぼり読む。戦況を見、議会報道、内地空襲の状況、論説等々、そこから少しでも驕敵反撃への端緒たるべき国道あるや、帝国陸海軍の挙げたる戦果如何、空爆に対する内地人の態度如何と。而してともすれば、前途暗澹たる気持にならんとする此の気持に、はっきりと必勝の確信を益々堅くせんとする、止むに止まれぬ気持。議会に於ける小磯総理大臣の演説、東京都に於ける益々熾烈を極むる凄惨極りない無差別夜間爆撃、紙面に表はれたるその惨状、罹災者の心情・現状を偲び、涙なくしては読み得ない。

特に九日夜に於ける爆撃は、我等の想像以上の被害の如く、実に気の毒の至りである。村人の言には、又更に尾にひれを附してデマが飛ぶ。実に皇国危急存亡の重大関頭を思はしむ。然し、烈々

たる国民の士気は我等の意を強うし、皇国必勝の道又総理大臣の言によっても明らかだ。更に此の上、飛行機の一大増産と相俟って、本土侵攻し来れるるFを水際に撃滅の日の、一日も速やかならん事を祈る。

（二十四日カラ三十日ノ記事ヲ欠ク）

二月三十一日

又一ケ月の日は夢の間に過ぎ去った。先づ本島無事、爆撃もなく、敵と相見ゆる日もなしに、無事三月を送りしを喜ぶ。然し、八丈島にとりては歴史に其の一頁を綴る疎開の姿を、現地派遣の我々はまさ〳〵と此の目で見、深刻なる八丈の姿を見せつけられた感がする。

十八日を始めに、二十五日、二十八日と村の人々は、不安と焦燥と別離の涙を以て八丈を去って行った。菊地（ママ）多伝さんも行く。行くか行かぬかと奥さん始め躊躇して居た。和田道子母子も行き、□□もおとき婆さんも皆行ってしまった。弟に似て居ると、何時も懐しげに話してくれた沖山運平さん一家も。あの日は八丈には珍しい、晴れた暖い桜の花がチラ〳〵咲き始めた、海穏かな良い日和であった。ひっきりなしに運ぶトラックの列、行く者、送られる者、共に泣き乍ら別れて行く島民の姿、我々にとっても恐らく一生忘れる事の出来ない、涙ぐましい状景であった。

戦局の悲局を恐れ、不安がり、海上輸送に危惧を抱き、東京・横浜地区の爆撃の噂におびえ、荷物の不着を案じ、疎開地の食生活の不自由を今から恐れ、只軍の奨めに従って、渋々乍らも疎開の決心を確（ママ）めた村人。又残る者は、支庁なき、役場もなき今後、食料の配給とてもない生活。硫黄島の如く、サイパン島の如く、悲境に陥る日あるかと憂へつゝ、八丈島の孤島の愛着断ち難く、軍官の奨めも横を向いて、遮二無二八丈の生活を楽しまんとする村人。そして心の底では、疎開者は残る者に幸福あるかと心残り、残る者は疎開した方が将来幸せかも知れぬと考へて、自己の将来を案ずる等、割り切れぬ村の姿である。

別れの涙は尽きず、再び来る日なきかとの気持を抱き、夫婦の情愛、父子の情、近所皆泣き合っての別れ、洵人の情に変りなく、同情の念禁じ難きも、今や戦局は帝国興廃の重大関頭に立つの秋、村人の姿を見ては、洵に島人根性の浅はかさ、女々しさ、同情の反面、噴さえ感ずる。

特に出発に際しての、野菜物始め家財道具を兵隊達に売る闇値の法外ぶり、一銭でも多くとあせる浅間しさ。まして二重売までなす者あると聞いては、非日本人的行為の、如何に細部まで浸潤せるかを思ひ、実に慄然たるものがある。日本の戦局の不利、生産の低下、飛行機の飛ばない理由も、此処に見出すやうな気持になった。而も落ちて行く姿にとって、益々奮闘、戦争は是が非でも勝たねばならぬと痛感した。

本日のラジオは、琉球列島方面の一大戦果を伝へる。撃沈三〇、撃破二〇、二十三日以降総計九〇隻と。夕食に白崎を迎へて、祝酒にホロ酔ひ機嫌には思はず万才を叫ばしめる。琉球こそ帝国にとって、既に言明せる一大戦勝を獲得すべき場所だ。感謝と共に

勝利を祈る事特に切なり。
三月は暮れて行く、桜の花吹雪の中に。

再び筆執るに際して

暫く行方不明だった此の帳面が、山の糧秣小屋から発見されて、四月前に書いた感想文を読んで独り苦笑しつゝ、今再び何でも書いて見たくなった。硫黄島爆撃、F上陸と相俟って、本島へのF来襲ー硫黄島の玉砕ー八丈島の疎開ー沖縄へのFの上陸と、慌しい二月、三月、あれから早や四ケ月、今現在こうして達者で居ようとは、夢にも思へなかったのに……。
忘れたやうに本島へのFの攻撃は緩慢であり、むしろ皆無の状態だ。
沖縄の失陷、内地各地の無差別爆撃、最近では遂に、敦賀・福井等郷土の爆撃を聞き、まさか八丈島が、我々の故郷より安全な夏を迎へようとは夢にも思へなつた(か脱)。七月二十日を期して、中隊は全員山の陣地、山岳兵舎への移動完了。僕は一人部落内の糧秣の監視を兼ねて居残りだ。一人寂しい生活、自然思ひのまゝを書き綴って、慰めの一助にもと机に向ふ。戦争はどう展開するか、故郷の父母妻子はどうして居るやら。

七月二十二日

昨夜は杉田曹長一しょに泊って、蚊帳の中での話がはずんで、ずいぶん遅くまで起きて居たが、今朝は五時半に目が覚め、昨日貰った葱苗の選りわけをなし、定植準備。富永と二人で糧秣集積を終へて、午後は葱の定植だ。此頃戦局の苛烈さと反比例して、八丈の安全感が益々根強くなってくる。此んな状態だったら、甘藷も植えて置くのだったと惜しまれる。里芋も作って見たが、肥料不足でさっぱり駄目、胡瓜もトマトも不出来。俺も暫く農を離れて居た間に、随分惰け者になったものだと自らあきれ返る。ともあれ此れから留守居を兼ねて土に親しみ、皆が驚く様な収穫を挙げて見たい等の希望を持ちつゝ鍬を振った。
七時のニュース聞きに行けば、時刻過ぎて戦況は終り、隊長室で入浴、一日を終る。

七月二十三日

水虫に傷んだ足も漸く快癒し、本日は久しぶりに陣地の宿舎を訪れて見る。富永と二人で硝子戸四本を運び、汗を流して登山、八時半宿舎に到着す。暫く見ぬ間に立派に出来上り、山岳兵舎には勿体ない位。奇麗な水音を立てゝ流れ、真夏とも思へぬ冷気ヒヤリと肌をなで、まこと深山の別荘を思はせる。我等の家、我等の住居、又一そうの愛着を覚ゆる。
昼食を御馳走になり、午後二時過、白崎と二人下山す。留守の宿舎はヒッソリと誰一人居らず、何だか今更乍ら取り残されたやうな感がする。経理室に行き砂糖を受領す。山岸伍長と話す中、横越の者と聞き、故郷の話に花が咲き懐しさ一入なり。

二十四日(ママ)

昨夜は白崎が渡辺少尉の送別会に招かれ、帰りを待ちつゝ十一時半頃まで小説を読んで居たのに、遂に泊って返る。

午前中、増谷軍曹下山、午後、池上・今井両曹長下山し、渡辺・天津は夜来り、今日一日は人の気配が濃厚で、何となく賑やかな一日だった。

夏とも思へぬ涼しい陽気、故郷の田畑の出来を案ずる。昨年は游泳演習にて、毎日松原で泳いだものだった。然し今日一日、又苛烈なる戦局を他に（所脱カ）、平和な八丈の一日を送り有難く感謝す。

一十五日

白崎もいよ〳〵明日か明後日あたり出航らしい話に、さゝやか乍らも御馳走をと思っても、俺一人の腕ではどうする事も出来ず、大沢さんにお願ひして夕食の準備をして戴く。午後、池上曹長も下山致し、中隊長・横川・富永等皆会同して、お酒も御馳走もなにもないけれど楽しく夕餉、ほんとにさゝやかな形ばかりの会食。然し白崎も、此んな事もあったと思ひ出してくれる日があれば何より幸せ。夕食後、白崎を連れて大沢方へ遊びに行き面白く話す。午後九時半頃、指揮班より、F機動部隊の来襲企図に関する情報来る。池上曹長慌しく上山、我々又稍緊張す。何事もなく夜は更ける。

一十六日

待望の煙草が給され、朝早く持参して上山。暫く皆んなと別れて居ると、何だか他の家へ来たやうな、一寸変な恥しさがする。救急食の腐敗状況を調べて、十時頃下山す。

晩、ニュースを聞きに行き、小倉中尉に報告、二人で故郷を話し、家庭を話し、戦局を論じ、華かなりし昔しの政治問題を聞き、時過ぐるを忘れ十一時頃就寝す。

本日のニュースに又福井市の爆撃を聞く。我々の福井市、賑やかな奇麗な街、漸く近代都市の相貌を備へて来た福井、B29の百キ以上も来襲せしとか、どうなったやらと思ふ。燃え尽してしまったかしら。爆撃の状況を想像して一人胸傷む。

二十八日

明日は人形の展覧会があり、今日はそれの下検査を行ふ。各小隊長、思ひ思ひの人形を持ち来る。正に百鬼野（夜）行をと言ひたい光景だ。然し笑ふ勿れ、皆一心こめて、米鬼撃砕への一ツの手段として、製作せしものばかりである。

正午、急に白崎の出発を通知し来り、慌てゝ準備せしに又止めになる。依然海域に於ける情勢は、危険極りなきものゝ如し。

二十九日

まだ現在の生活に馴れ切れぬのか、何となく心寂しく、ぢっとし居れぬ気持に襲はれる。修養が足りぬのだらうか。俗気が抜け切れぬのだらうか。ともあれ話し相手のない生活と言ふものは、寂しいものだ。夕暮れになってラジオを聞きに行き、後から小倉中尉や隊長に話に行くのは、何と言っても一番楽しい日課の一つになってしまった。

三十日

中隊長殿もいよ〳〵上山生活と決り、富永は荷物運び。午後、隊長も上る。いよ〳〵取り残されてしまった。

朝、隊長より自活対策に関し種々話しあり、どうも俺は中隊の自

活隊長にでもなりそうな気配。農業勿論厭ふに非らざるも、現在のやうな放任主義な、唯面積のみ増して収穫の伴はざるやり方には、気乗りがしない。給養係にもホト〳〵いやになった。

第一昨年野戦に出発するに就ても、曹長要員としての転属であったのだ。それが何時の間にやら、給養係に転落してしまって、別段いやな顔もしないで働いて居るのだ。特別腹も立たず、馬鹿くさいとも思へぬけれど、時々フッと厭気もさす事もあると言ふものだ。

八月一日附にて曹長に申請して、確実に進級するからと池上曹長がそっとさゝやいてくれた。現役当時頃のやうに階級に対して執着はないけれど、何だか此の頃妙に気持の中に、胸ときめくやうな感じがし出して、ほんとになれるかしら、若しなれなかったら……、曹長になれば又あの軍刀を返して貰へるかしら……、然し員数が足らないから、俺だけ短剣でも吊って居らねばなるまい……。そしたらつまらぬナ……。曹長になってもやはり給養係だらうナ……等々、子供の考へるやうな事を、真剣になって恐いやうな、発表を待つやうな、胸の躍る気持になって来た。

三十三才になり、三人の父親になっても、依然子供心もあり、進級の望みもあるのだと、自ら自らの心を眺めて居る。

白崎候補生の出発

今日か明日かと毎日落ち着かぬ気持で、教育隊分遣の命を待つ白崎。情況悪しく、船の二隻も入って居ながら、何時までたっても何の音沙汰なし。今日は午後一時に船が出航すると言ふ局からの話に、朝から弁当を作って待って居ても、依然何の命令も入らない。十時半になっても遂に命なきため、俺も今日も又駄目だと言って、山の一、二小隊の宿舎を見に行く。

十二時過ぎ帰って見れば、ほんの今出発した後と聞き、洵に残念至極、実に可愛そうに思ふ。晴れの入□門出に誰一人見送る者もなく、寂しく出発した心中を思ひ、俺の心も空虚な気持に一ぱいになる。而も三根に待期(マヽ)中とは、思っても惜しい事をしたものだ。ともあれ海上無事入□を祈る。

(八月一日ノ記事ナシ)

八月二日

慌しき一日だった。あれこれとか、給与の受領分配、米麦の分配に、一日汗みどろになって働く。日が暮れる頃進級命令を受く。何とも言へぬ嬉しい気持がする。今日の気持、忘れ得ぬ思ひを、敢へて筆にするまでもなし。

八月三日

朝八時半、晴れて進級の申告を行ふ。池上曹長殿の准尉進級又目出度き限りなり。

お昼は、小倉中尉・池上准尉三人で、ビール一本を分け合って御祝する。

今日は富士夫の誕生日だ。喜びの二重奏とは此の事か。

(八月四日ノ記事モナイ)

八月五日

山の指揮班に上って、池上准尉の祝酒を御馳走になる。久しぶり

に皆と一しょに賑やかに騒ぐ。楽しい一日。

八月六日

涼しい山の別荘、渓流の流れの音を聞き乍ら、フト山中温泉の一夜を思い出す。

夜明け方には、毛布二枚をしっかり包って寝て居た。七時半に下山。飯盒問題でずいぶん腹が立つ。午後は休日。増谷君と二人で碁を打ち暮す。久しぶりにラジオを聞きに行く。辰也さんであはびを御馳走になり、茄子を御馳走になる。八時半頃、塚田君遊びに来る。

八月七日

故郷より便り来る。お父さんのハガキ、はるゑの手紙、大島氏・市五郎・山田寛君、九州の福島兄等。便り程嬉しいものはない。子供の事、家の事、福井爆撃の事、細々綴る筆の跡。拙い文字、間違った文章も時々見受けるも、脈々と流れ居る愛情、ヒシ〳〵と文字を通じて胸を打つ。

福井空襲は実に悲惨の極を極めし模様。市民十万の苦しみ、正に焼熱（焦）地獄を呈し、どんなに残念な思ひ、怖ろしい思ひがした事であらう。戦争の惨状は何処まで続く事か。今日は他人事、明日は我が事とは、実に現在のやうな状勢を言ふのであらう。

子供達は何も知らずに無邪気に遊ぶ。可愛いゝ子供にだけは、再びこんな思ひはさせたくないと思ふ。

八月八日

今日一日しっかりお百姓をする。トマトの草むしり、暑さにすっかり参る。汗とほこりに泥々になる。故郷で父母や妻が、もっと〳〵苦しい中を頑張ってやって居る事を思ひ、実に済まない気持で一杯になる。

午後は倉友と二人で、下肥を茄子・葱等に施す。

八月九日

重大ニュースありとの伊藤見士君の話に、取り敢へず午後七時ラジオの前に行く。放送員の声やおそし。「七時の報道であります。ソ聯は不法にも越境し、我が方に攻撃して参りました」「大本営発表、八月九日十七時。八月九日〇時頃、ソ聯軍の一部は、東部及西部満ソ国境をより攻撃を開始せり。又航空キの少数キは、朝鮮及北満国境を越へ攻撃し来れり。二、所在の我が日満部隊は、自衛のため目下之と交戦中なり。関東軍発表、八月九日三、三〇……」。

驚くべき報道、息詰り、胸詰る思ひ。あゝ遂に赤鬼スターリン、毒牙を我に向けしか。弱身（味）につけ込んで来るソ聯。米ソ戦ふか等言ふ者ありしが、実に笑止千万、矛は我に向けて来たれり。米・英・ソ・重四ケ国を相手に廻して、果して勝ち抜き得るか。必勝の信念を今更言っても始まらない。我国の運命遂に来るところまで来たるを思ふ。

政府は何故我々国民に「最後の斬込を敢行、一億玉砕すとも一人でも多く米・英・ソを倒せ」と叫ばないのか。

銘記せよ！　大日本帝国新しき出発の日

十二時半より畏くも天皇陛下、親しく玉音以てラジオ放送遊ばさる旨拝し、単独の軍装に位儀(ママ)を正して、辰哉(ママ)宅ラジオの前に集合する。流れ来る君が代の吹奏、次いで呼(ママ)鳴、胸せまる畏くも勿体なき陛下のお声。

唯感激に胸恐(ママ)き、仰せらるゝ言葉も聞きとれず。時々漏れ拝承する、朕ハ汝等国民の哀惜をよく知る、戦ひに殲れし勇士の遺族、傷ける勇士をいたわり、等の意味を知るのみ。荘重なる御玉音遂に消え、再び起る君が代の楽。次いで鈴木首相の内閣告諭、一語一語聞へてくる予期せざるホツダム(ママ)宣言受理、米英に対する和を乞ひし意味判り、アッと驚くと共にグッと込み上げてくる熱い涙。止めどなく流れる涙は拭ひもやらず、口惜しさ、悲しさ、怒り、人前もはばからず、ワッと声を上げて泣きたい心。

開戦以来四年に亘り心血をそゝぎ、兵士も国民も、戦友の屍を乗り越へ乗り越へて戦ひ続け、その間戦に殲れしもの其の数を知らず、傷つけるもの又無数に。更に国土は焼(ママ)土と化し、無辜の老幼婦女子に至るまで、F火に殪れしもの実に無慮。然し、かくなるは已に覚悟の前、国民全滅すとも降伏はすまじ。民族の名誉にかけて、日本国民の偉大さを世界に示して、一億玉砕をと誓ひしに、あゝ事遂に此処に至る、又何をか言はん。

而も、ラジオを通じて報ぜらるゝかくなりし理由、状勢。ソ聯の参戦、原子爆弾使用、米英に和を講ぜざるを得ない戦争の現状。

特に陛下の民草を思はせられ、人民の此の上の苦しみを見るに忍びず、朕は例ひ昿野に屍を曝すとも厭はねど、民草が可愛いゝ。

人類を救ひ、世界の平和を速やかに回復するため、忍ぶべからざるを忍び、耐ゆべからざるに耐へ、敢へて国体の護持の最後の一線を残して、無条件にホツダム宣言を受け入れる事になった。

大詔は既に喚(換)発あらせられたり。

我等国民の向ふ所、自ら炳呼(乎)として明らかなり。詔承(ママ)必謹、神州の不滅を信じつゝ、皇国国体の護持を守り抜き、誓って此の国難を克服して、偉大なる大日本帝国を一日も早く回復せねばならない。忍苦の生活、もっと〳〵苦しい生活、更に劇しい艱難辛苦が来るであらう。然し、真に偉大なる民族としての、新しい出発の大号令は下された。いばらの道を切り開き、皇国を復興する事こそ、生き残った我等に課せられし最大最高の任務、皇国護持の最後の一線を残して、今日の日本はもう昨日の日本に非ず。

前途に横はる冷厳なる我国の姿を想ひ、明日から始められる、幾多の悲しむべき敗戦国の歩みを思へば、唯泣けてくる。

総べてを忍ばれ、あらゆる忍苦を克服して、涙を振って、国民の災状を見るに忍びず、と仰せられて、矛を収められた陛下の御仁慈の程、御心中の程、拝察するだに畏ききはみ。民草の至らざるが故に、今日の難を招来せし罪、万死に価す。然もお叱りもなく、此の有難きお言葉、誰か皇恩に泣かざらん。大君の御徳広大無辺、大君の御恩、日本国に生を享けし有難さを、今日ほどはっきりと感じた事は始めてであった。

一億玉砕をと張りつめた心が、一度に今日の聖断に、一種計りきれぬ衝撃を与へ、一時は唯ボンヤリ、夢に夢見る心持。

神代此の方、一度も敵に負けた事なき我が大日本。而るに今日の敗戦。吾等が父祖が国を堵して戦ひ、獲得し、身を細らせて肥やし、築き上げて来た台湾も、満州も、朝鮮も、皆敵の手に。而も樺太まで。幾十万の英魂眠る、我血を流した支那大陸も、又蔣介石に返さねばならぬ。思へば〳〵悲しき事実。

本晩は、命令受領のためPに宿営す。蚊が一匹、二匹、耳元でブーンと音を立てゝ飛び、心はあれこれとかきめぐる、悲しさ、口惜しさ。眠らんとすれば尚眠れず、十一時、十二時、一時、二時、ウト〳〵と居眠りの如く、三時を知らず。四時に目が覚め、昨日は夢だったかと思へど、間違ふ事なく現実だ。

忘れられない日、八月十五日。

編成一（ママ）週年記念日

八月十五日は編成記念日だ。それが南地区隊対抗演習のため、十八日を祝典日とす。今日此の目出度き日を、かゝる情勢下に迎ふ。午前五時半三島神社に参拝、戦没勇士の冥福を祈り、帝国の前途、国体護持、皇国の将来の発展を祈念す。

後、中隊長の命により、大詔喚発に就き、現在の日本帝国の情勢に就き、中隊全員に学科す。八時半より国民学校に於て閲兵分列。終了後十時より、撲（ママ）相・棒倒し等の競技会ある。俺は被服一般の業務多忙のため出席できず。夜は盆踊りあり。尚此の日、予て菊池に依頼しありしお酒出来し故、進級祝の祝宴開き、皆賑やかに酔うて、踊りに赴く。福本君と会ひ、帝国の敗戦に就き慨嘆之久しくし踊らず。楽しかるべき日も、あれを思ひ之を思ひ、心の底から朗らかになりきれず、唯一杯のお酒に、口先の歌声に、悲しき心を忘れんとするのみ。かゞり火を囲み、やぐら太鼓賑やかに、十三度の月中天にあり。世が世であれば日本国中、歌声揃へて盆を踊り狂ふたであらうに。

国ぢゃ今頃、どんな気持でどんなに暮して居るかしら。戦敗国のお盆、編成記念日として先づ〳〵忘れて暮す。

九月四日

帝国戈を収めてより早くも二十日、去る二日には横浜沖に於て、我等の忘れ難き、屈辱的無条件降伏の調印式が行はれ、ラジオの声を聞き、当時の光景を偲び、洵に悲しい思ひに胸せまり、茲に肇国以来始めての帝国敗北の事実は、現実に現はれて来た。大東亜地域の我忠勇なる将兵は、泣いて武器を捨て、敵国の軍門に下る。比島敗戦の将マッカーサーは、今堂々の米艦隊を引具して横浜に進駐し、幾万の米軍は神州に上陸して来た。空には敵機が我物顔に乱舞して居る。あゝ此の飛行機で、我等の同胞は恨を呑んで殲れて行ったのだ。東京都始め、進駐地区の国民の無念さは如何ばかりだらう。

今日此の日、我等は八丈島に於て休養日が与へられ、兵団派遣の鉄壁慰問団を迎へて、一日面白く暮した。過ぎし事を如何に口惜しがって見ても始まらない。我々は此れから敗戦の巷から立ち上って、更に平和と文化に恵まれた、新日本を建設して行かねばならないのだ。涙をかくして笑顔を以て、新しき日本再建に邁進せ

ねばならない。今日一日、総べてを忘れて楽しく暮す。

陸軍と海軍と住民

八丈島来着より茲に一ケ年、斗魂烈々、八丈富士山上大日章旗を翻すの日を夢みつゝ陣地の構築に専念し、皇国の勝利を祈念しつゝ戦ひ来った此の一年間。良しにつけ悪しきにつけ、いろ〳〵の思ひ出、印象多き中に、私の頭に最も不快にして、忘るべからざる最も忌むべき思ひは、我等陸軍と海軍と、そして海軍軍属として疎開せずに居残って、威張りくさった八丈土民、チャンコ(ロ脱カ)の如き此の住民の関係である。

そも〳〵皇国の惨敗の原因にも多くあらうが、何と言っても一番負けたのは、国力の不足とは言ひ乍ら、我海軍ではなからうか。もっと制空(海)権を振って居たら、国内軍需産業振興し、航空機の生産も素晴しき成果を示したであらう。あんなに本土が炎土とはならなかったであらう。原子爆弾も使用し得なかったであらう。吾等は全般的な事は判らない。然し、此処八丈に現はれた海軍当局のやり方の、如何に悪らつであり、吾等忠勇なる、黙々と働く陸軍を苦しめた事か。私は永久忘れる事が出来ない。

海軍は海上に於ける戦闘任務を有し、陸軍を転送し、陸軍の補給を完全にし、後方の憂なく、安心して戦へるやうにするのが、最も大事な努めではなからうか。

然るに此処に現はれた海軍は、河童が岡へ上って唯自己の食料を運搬し、自己の酒や煙草を運ぶ事のみ船を使用し、全く陸軍に協力して居らざるのみか、その優れたる給養を誇示し、海軍々属を〈非国民的色彩濃厚なる、疎開せず、陸軍の邪魔をせんとしたる村民〉を多数徴発して、日夜めならべ共を会館に連れ込んで酒を飲み、生産隊員の生産物は独り海軍のみで使用、ぜいたくの限りを尽し、陸軍々人を見る事、乞食かどろぼう呼ばり致し、我等(陸脱)軍に対しては菜葉一枚供出せざるのみか、腹が空り、野菜ほしさに時折野荒し〈勿論最も悪い行為〉の不心得兵を、桿(棍)棒を持って大勢のニイヤ共が袋叩きにして捕へ、あたかも此れが全陸軍の行為であるかの如く宣伝し歩く等、此の悲しき情なさ、憤り。

陸軍のやり方は地味であり、将来補給なき場合を顧慮して、極度に糧秣を切りつめて居る関係上、かゝる悪徳漢の、無智な兵の出るは、幹部の指導良ろしきを得ず、その責任は痛切に感ずるも、一方に於ては美味しいものを満腹し、酒を密造し、煙草を密培し、ダイナマイトを以て捕魚を公然と行ひ、海軍の尻馬に乗って陸軍を侮辱せる此の島の土民に対しては、一方に恩義のある人も多いけれども、最も不快な印象として忘れる事は出来ない。

兵団銃剣術競技会　九月十三日

此の日、残暑きびしいとは言へ初秋の風爽やかに、朝早くより続々トラックにより、或は徒歩により詰めかけた各部隊のつはもの達、百戦錬磨の選りに選ばれたる選手達。今日晴れの試合を見むものと、中ノ郷・末吉・三根・土賀郷各地区より、道遠しとせず応援

に馳せ参じた将兵達によって、広い〳〵飛行場も一杯になる。各部隊選手は各々防具姿もりゝしく、主将の指導によって勇ましく準備運動。やがて定刻午前七時三十分、必勝の決意を眉間にひらめかせて整列、兵団長閣下の臨場の下開会を宣せらる。

吾等は先づ、第三道場に佐藤大隊と相対し、試合開始の号令と共に、今日の競技会の幕は切って落された。兵の部、下士官の部。それ〳〵裂帛の気合、木銃と木銃のふれ合ふ音、ドンと体当り、判決を下す審判官の厳かな声。戦友互に激励し合ひ、負けた者を慰め、勝者を賞め、部隊の名誉を一身に担って奮斗努力、銃剣術こそ実に男勝負の極致。戦争は終局したとは言へ、此の斗魂、此の気迫、一突一殺の剣技こそ皇軍の精華である。

僕は最初惜しくも下胴を一本取られた。然し何ら悲感しなかった。何くそ此れからだの意気込み、少しの油断なく戦ひ抜いた。准尉殿もよく勝って居る。遂に全勝の栄冠を得て居る。今井曹長・増谷軍曹達、中隊長も小倉大尉も、中隊全員の応援。負けられぬ此の勝負、息詰るやうな気持で試合は続けられて行く。増田部隊は実に優秀だとの声も聞ゆ。菅井教官の審判と参謀の審判、皆一生懸命だ。

いよ〳〵最後の試合に近づく。第一道場。相手は最剛（ママ）秋山部隊だ。審判の参謀も「両方とも頑張れ」と元気をつける。此の一戦こそ、彼優勝か我優勝かの、天下分け目の決戦である。

山岸伍長、先づ元気一杯突き込めば、軽く先先を突かれて敗る。次畑中伍長、之又今迄の試合上手に似合はず惨敗。網沢軍曹、何だか気合なく勝てる戦さに敗れ、栗田曹長・白銀伍長と、我が方は枕並へての討死だ。流石は音に聞へた秋山部隊、姿勢と言ひ、剣と言ひ、技と言ひ、確に一枚上手である。油断はならぬ。俺こそ一つ戦友の仇討ちをと、手具（ママ）すね引いて待つ。「八番」の声に先づ落ち着いて敬礼。審判の「始メ」の声、ウム敗けるものか。相手又勝ちに乗じて気勢充溢、殺気はみなぎる。ヤアーッ脱突だ。ウム残念外れたか。一合、二合、小競合ひ。敵は俄然攻勢に転じ、突ッ、直突を眼にもとまらぬ早業、南無三冷ッとする。間一髪之を外して態勢を整へれば、続いて来る二本目、正に繰り出さんとする瞬間、パッと入れた直突、見事決まってズバリ一本。審判の「ヨシ」の声聞ゆれど、続いて二本目、三本目、遂に敵を突き伏せて我の勝。

ア、此の一戦こそ戦友六人の仇を打ち、何と胸のすく思ひ、最後は軽く一蹴。秋山部隊に敗れて、遂に我大隊は第二位となる。第二位に敗れたりとは言ひ乍ら、悔いなき此の競技会、終生の思ひ出として残るであらう。特に俺は、九本の中七本勝ち、下士官の中第一位を以て、無事今日の勤めを終へたのは、何と言っても最も楽しい気持だった。

九月十五日

戦争終局の大詔を拝してより早くも一ケ月、先月今日十二時の御放送を拝聴した時のあの感激、驚愕未だ生々しく胸裏に甦って来る。

一ケ月後の今日既に米軍は本土に進駐し、敗戦国の寂しさの中に

も平和の光は漂ひ始めた。戦争犯罪人として、東条前首相以下沢山の元勲達が米軍に引き渡され、東条首相の自決未遂、杉山元帥夫妻の見事な自決、小泉厚相の自決等々、昭和の悲影は続々と報ぜられて行く。毎日聞くラジオの声も、今では全く束縛せられて米の声そっくりだ。南方諸地域の戦友たちは、三年も経たねば帰還出来ないと言ひ、満州の軍官民は、ソ聯の虐待下にありと聞く。敗戦国のみじめさは、刻々深刻化されて行く。

さて戦争終了後、私の気持はすっかり変ってしまった。あの頃は悲壮な覚悟の下、再び故郷の土を踏む時なきを思ひ、八丈玉砕の時は天晴れ奮戦の後、恥ずかしからぬ最後をと、常に心に期して居た。それが一度聖断下り、今や全く戦争は終り、吾等又近き将来には故郷に帰還の日ある事が確定すると、無性に故郷が恋しく、帰りたくて〳〵何時も何時も心は故郷へ、愛しき妻子の上にのみ馳せて行く。こんな事ではほんとに戦死した友に済まない、南方の友に申訳ないと思ひつゝも、思ふ後から恋し〳〵の気持が湧き出で、毎日夢に見、心は既に故山に帰って居る。

三年でも五年でもと、無事の帰りを待って居る父母妻子、敗れたりと言へ生きて帰れば、きっと心から両手を拡げて迎へてくれるに違ひない。今日は故郷では氏神様のお祭日だ。農林一号の刈り取りは済んだらうか、御馳走もあったでせうか。子供達は、父ちゃん帰ると指折り数へて待って居るに違ひない。来月半頃には、故国の土を踏む事が出来るだらうか。そしたら晩稲刈りには手伝ひをして、又富士坊や浩坊、今では大きくなった英坊を車に乗せて遊ばせてやらう。現役以来軍隊生活約六ケ年、帰ったらもう浮世離れて暖い家庭を結び、仲良い、楽しい家を築き上げて、金も名誉も忘れて、美しく平和な楽しい人生を送りたいと思ふ。

国家は今正に超非常事態、お国に尽す道は忘れねど、戦ひ疲れた身体を休める最も暖い愛の家庭こそ、私の一番の希望である。可愛い妻は、きっと私が満足する以上に、愛情を傾け尽してくれるに違ひない。優しいはるゑ、病弱な身体を無理して留守中頑張ってくれた彼女に、少しは楽もさせてやりたい。老ひたる父母にも、もう隠居して老後をゆる〳〵生活して貰ほう。

両親もずいぶん永い間子供達を戦場に送り、苦労を重ねられた。私の帰ってからの最大の努めは、両親に孝養を尽し、愛妻の労苦をねぎらひ、いたわってやりたいと思ふ。

眼をつぶって、故郷に帰るの日を想像して見る。笑顔で迎へてくれる肉親の姿を思ひ出して見る。帰ったら先づ何から仕事を始めようか。

九月二十三日記

暁の夢を破って物凄い雨々々、篠衝くやうな八丈の雨。点呼に行った兵達さん達は、ワッと声を挙げて土砂降りの中を駈け戻って来る。連日の慌しさから少しは心のゆとりを戻して、今日一日はせめてのんびり暮して見ようか等、少しサボタージュな気持も手伝って、床の中からそのつもりで居る。雨よ降れ〳〵、のん気でよろしい。

早速昨日借りて来た「磯川兵助功名噺」を読み耽る。善人で正直

で、粗忽で邪気のない兵助、常に大失敗を繰り返す彼が、お津絵に慕はれ、女に騒がれ、馬廻り小者から三千石の家老にまで出世する野村胡堂の小説、洵に面白く読む。九時半、小説も読み終り、机に向って又思ひのまゝを書いて見たく、日誌に向ふ。さて何を書こか（う脱カ）と一思案……。

刺激のない生活、変化のない生活、困（難脱カ）の多い生活、此れ程退屈なものはない。一日の日の長さの何と永い事よ。それが此れから続こうとして居る。而も楽しき船出の日を、一日千秋の想ひをこめて待ちつゝ。

吾等の今の望みは、さらば八丈の日、故山に帰って懐しの人々と再会の夢のみ。而もそれは、近き日に約束づけられて居るのだ。将校も下士官も兵も、寄ると障ると帰還の話で持ち切り。曰ク「十月上旬」、曰ク「来年四、五月迄」、曰ク何々、曰ク何々、飄々呼として噂は坂下より来り末吉に及ぶ。何時の間にかデマは消ゆれば、又新たな噂は真しやかに東の風に乗って、十月説が全島を覆ふ。そして人々は悲感し又喜び、その日の確定されるを一心に祈り、その楽しき日を発見せんと、あらゆる情報を集めて居る。然し、今日、昨日の噂は先づ真なりと思ふ。曰ク、増田部隊十九番、第十航海、来船は十一月中旬頃？　等々。

十一月上旬！　何と遠い事に感ずるのだらう。他の部隊の中には、早くも今月末出航がある由。又部隊内でも特殊の職業者は、一番船で帰る事定まる。たった一ケ月か四十日の差異すら、自分が大変不運の如く感ずる浅間しさ。

ともあれ帰還は約束づけられた。

退屈なる一ケ月を、如何に楽しく暮すかが最大の問題だ。日よ早く暮れよ。

一日よ早く経てよ。

十月十五日記

九月末から十月十三日迄、思へば多忙な毎日であった。被服引上、個人支給、物品引上、糧秣決算、糧秣返納、帳簿整理、週番、先発者の帰還等々。人々は碁を打ち、昼寝し、ゴロ〳〵遊ぶ事に身を苦しませて居る時、俺の仕事は如何にやっても〳〵終り切れない。時に馬鹿らしいと思ひ、時に結構だと思ふ。ともあれ無事終った。サア此れから俺も皆の仲間入りか。

十月二日を予定された先発者の帰還も四日に遅れ、其の後は何時出るとも知れぬ帰還船。第二回船楓丸は、不幸三宅島に遭難と聞く。海は荒れ狂ひ、我等の帰還は十一月末日迄に完了せば、良好ならんとの話、又待ち遠しい極みと言はねばならぬ。

昨夜は酒宴を張り、菊池方より戴いた赤飯とお酒五升、皆酔ひに酔ひ実に賑やかだった。一昨日は和田氏で招ばれ、昨夜は隊の会食、洵に八丈ならではの此頃の大尽暮しである。増田君の昨夜の傑作、又八丈の思ひ出として忘れぬ事件であらう。

魚釣り

今井曹長の発言により釣りに行こうと誘はれ、勝太郎さん方に立寄り、釣道具一揃へ借用し、増谷君と三人連れで中ッチョへ出か

けた。
天高く馬肥ゆるか、牛肥ゆるか知らぬが、正に天候は秋日和。空は飽くまで碧く澄み亘り、暑からず寒からず、散歩によし、行楽によし。勿論遊びに行くやうな面白い処もなけれど鼻歌混り、釣れるだらうか、釣れぬだらうか。魚のかゝった瞬間！　グイ〳〵引く魚を釣り上げる妙味等空想しながら、細道をかき分け、道に迷う等傑作もやり乍ら、来るは此処ぞ、釣場として中ノ郷に有名なる、どんな字を書くか知らぬが、俗称中ッチョ。
危険千万なる腐りかけたやうな梯子が、切り立つ断崖にかけてある。下を見下ろせば百尺以上の断崖絶壁、奇岩乱岩散在し、太平洋の波濤玉と砕けて白いしぶきを上げて居る。岩の続く処防波堤をなし、右方畳根との間に湾を形成して居る。あそこが釣場か等思ひ乍ら、暫し瞰下の絶景に見惚れて居たが、「ボツ〳〵下りようか」と、恐る〳〵梯子に足をかけて下り始む。梯子を伝へば驚いた事には、此の梯子、一段の距離が三尺もある。いくら足を伸しても、仲々次の段に届かぬと言ふ厄介な梯子だ。でも漸く下り終り、増谷君を先頭に岩を飛び伝ひ乍ら釣場に向ふ。
中程迄来れば更に一番の難所、親知らず子知らずの如き場所がある。此方の岩から次の岩まで三間余も離れ、下は深き淵をなし、常時波が白きしぶきを寄せては返す。その中間に小さな足場となる岩あり。足場の先に飛び移り、再び向ふ岸へ飛ぶ。一歩誤ればその波の中へポチャンコだ。
然し、落ちた所が生命には別状ないから安心なものの、気持の良いものではない。難所を超(越)へて行けば岩の突端、南は波寄するも、北側は淵をなし波静か。此処ぞ、我等の今から釣らんとする釣場である。
先客として、憲兵さんと地方の人が二人。一人は太郎爺のやうな人相悪いきたない親父、一人は奇麗な顔の村の若い衆だ。
「釣れますか」
「一せつ駄目どはぢゃ」
覗いて見れば、小ちゃな魚が一匹岩陰に投げ込んである。若い衆は今来たばかりと見え、釣の準備に忙しい。
増谷君に糸の長さを聞き、餌のつけ方を尋ねて準備をなす。川では釣った事はあっても、海で釣るのは始めて故、一から十まで教へを乞はざるを得ない。餌は、和田君に貰ったむろ鰺を、三枚に下ろして小さく切り、大きな針につける。竿が長く、糸が長くて、洵に具合が悪い事夥しい。
釣糸を垂れて岩に腰かけ、歌を歌ひ乍ら、グイと今に引くか〳〵と待って居る。待てど暮せどコツンとも音沙汰なし。今井・増谷両君も異常なし。その中突然憲兵さんが、奇(ママ)用な手つきで竿を上げて、遂にビンナガと言ふ優秀な魚を一匹釣り上げた。それ釣れるぞと、皆勢込んでヂッと敵来るを待つ。然し、我々の手には少しも手ごたへなし。今井曹長が「かゝったぞー」と、例の調子で竿を上げれば何としても上らぬ。上がらぬ筈だ、岩に釣(針カ)を引っ掛けて居るのだ。遂に釣を下落として切ってしまった。
「惜しい事をした、今のは確に大きな奴だ」と言ふ。隣の爺さん

が「その魚は、人の十人や二十人、千トンの船でも上りませんぢゃー」と言ふ。俺もその尻について「今井曹長、それは岩にかゝったのだよ」と言へば、「馬かな事があるものか、俺がこうして居たらグイと引いたんだ。岩と魚と間違ったりするものか」と、カン〳〵になって怒って居る。と、その中又、今井君が「ウン、来た〳〵」と叫び乍ら竿を上げれば、オ！　釣れた〳〵、赤い魚が右に左に泳ぎ乍ら、糸に引かれて上ってくる。赤バと言ふそうな。美しい魚だ。一番乗りは今井曹長に上る。増谷軍曹が「釣れるぞ〳〵」と呼ばい乍ら、釣糸を垂れて居る。「山本君見よ、岩ぢゃないんだ、先きのも魚だったんだよ」と、今井曹長に言はれて俺は無条件降伏。

その中又、今井曹長が赤バを釣り上げた。増谷軍曹が「どうもその場所がよいな」と言ひ乍ら来て、針を入れるか入れぬ中に、ビン長一匹釣り上ぐ。そのこうする中向ふの岩では、若衆が続けてビン長二匹釣る。今井曹長が又岩に引っかけて魚だと言って騒ぐ。皆んな賑やかな事。俺一人ウントもツンとも手ごたへのない釣糸を眺めて、他人の喜ぶ様を羨しげに眺めて居るより仕様がない。どうも駄目だ、俺にだけかゝらぬとは、俺もよく〳〵今日は運がないな。エイ、真似でもよいからグイと引いてくれぬかと、あせって見ても駄目。

「あゝいやになった、もうかへろうかナア」と言へば、「なあに此れからだよ、山本曹長心配するな、此れから釣れるよ」と、増谷君が精をつける。そうかなー、よしねばってやらう。此れは一つのバクチか籤引きのやうなものだ。上手下手で釣れるものではない。竿も同じ、糸も同じ、釣も同じ、餌も同じ、場所も同じぢゃないかと、度胸定めて今度は至極朗らかに、又歌を唄ひ乍ら居る。増谷君が又赤バを釣る。と、俺の糸も引くやうだ。それ来たと、胸をワク〳〵させ乍らグイと竿を上げれば、重いぞ〳〵、竿を弓の如くしはらせて魚が逃げ廻る。もう糸が長くて竿は駄目、釣竿を捨てゝ糸を持って引き上げる。オヽ、見事な大きな鯛のやうな赤い魚だ。きけばムツゴと言ふ魚だそうな。あゝ此れで俺も仲間入り出来た思ふ心と、釣り上げた嬉しさで、嬉しくて〳〵たまらない。増谷君が「どうだ釣れるよ」と笑って居る。日は既に海に入って、あたりは漸く夕ほやが立ち込む。八丈と言へどももう十月中過ぎだ。フク〳〵と冷い風が吹き始めた。然し、もう帰らうかと言ふものがない。

もう一匹、もう一匹と思ひつゝ、一心に糸を垂れて居る。もう帰らうかと言はうかと思って居る中、又俺の糸を引く。上げて見れば一等大きな赤バだ。増谷君が又釣る。さあ大変だ。今井君があれから一匹も釣れぬのだから、気をいら〳〵して何とかしてもう一匹と頑張る。もう帰らうを言っても仲々。とう〳〵もう駄目と思ったか、すっかりあたりが夕闇に包まれてから、帰りにかゝる。大漁だねと歌ひ乍ら、七匹の収獲獲物を下げて意気揚々だ。然し、帰りの道が大問題だ。先づ親知らずで今井さんが、何としてもヒる〳〵と言って、俺と増谷君が向ふへ一ぺんに飛び移ってしまっても、何としてもよう飛ばない。十五分も二十分も暇どって漸く

渡り、再び梯子を渡り、夜道を実に意気揚々と引揚げて帰る。勝太郎さんに見せれば、嘘でせうと本当にしない。辰哉宅のおりかばあさんに見せたら、又誰かに貰ったんだらうと言ふ。素人にしては正に大漁、晩御飯のお菜には刺身にする。隊長に一匹進上。ともあれ楽しかりし初の釣りの今日の日よ。

新聞を読みて弟重雄を想ふ

最近の新聞来たるとの話に、本部へ読みに行く。十月二十日頃より十月二十六日頃までのものだ。戦後の国内の動き、政治、経済、文化、思想、食糧問題、戦後復興問題、種々伝えられる赤裸々な姿。何れを読み、何れの文字もを見ても、民主々義と自由の言葉に埋め尽され、軍閥を呪う声満ち〳〵て居る。マッカーサーの検閲が恐い為め、かくの如く伝へるものか。真に日本国民全部が、こんなに思想的に変化せしものか。八丈で聞く我々には、洵に母国の姿が寂しく、憂ふべき状態だ。議論倒れ、国内互いに相争ふ様、日本人の敵は一朝にして軍と官になり、昨日の敵米軍は日本の救世主と仰がれて居る様、恐るべき日本の危機と言はざるを得ない。新聞・ラジオの論調は、日本を亡国へ〳〵と駈り立てゝ居る。

さて今日新聞を拾ひ読みする中、大東亜戦争当時のあちこちの戦況の真相が発表されて居る。マリアナ・サイパンの玉砕の真相、比島戦、沖縄戦等。あゝ伝へられる戦ひの、何と悲惨極まる様相であることか。敗れに敗れた日本軍の姿、哀れ皇軍将士の敗残の姿、実に涙なくして読み得ぬ悲しき事実。俺は今の今迄、比島の弟達、垣部隊は、レイテ島よりルソン島に転進せるものとばかり信じ、必ずや〳〵ルソン島の山中に草を嚙み、野に伏して、達者で居てくれるものと信じて居たのに、何と悲しい事だらう。ルソレイテ島守備の精鋭垣部隊は、レイテ上陸戦第一日、艦砲射撃により瞬く間に全滅すと。而もレイテ戦の激戦は、それから連続であり、増援軍も旧守備軍も統(ママ)べて丸裸になり、食ふに食なく、米軍の砲撃と残敵掃蕩の矛を除けながら、山中を彷徨しつゝ、遂に全員帰らぬ人に帰し終ったる様子。

哀れはかなき我弟重雄、苦痛なく戦死してくれたであらうか。どんなにつらい思ひをしたであらう。どんなに愛する妻子に遭ひたかったであらう。帰りたかったであらうに。死んだとは夢々思はれぬ。然し、此の報道が事実とすれば、あきらめねばならない。せめて捕虜になって居てもよい、生命だけは持って居てほしい。兄はそんな気持で神仏様に祈る。故郷で此の新聞を読んだ父母妻子は、どんな気持だらうか。

〈完〉

[付記]

本稿は多くの方々のお世話によって成ったものである。連載を終えるに当たって改めてお礼を申し上げたい。

先ず武の御長男で、本学工学部教授山本富士夫氏と御母堂のハルエ様に深謝せねばならない。『従軍記録』を読んで感動した私

は、富士夫氏に「陣中日記」原本の閲読をお願いした。氏は快く承知して下さったのみならず、新たに二冊の日記を探し出し、長期間の貸与まで許されたのである。七冊の日記を一瞥した私は、素人ながら大変貴重な史料だと思った。『従軍記録』も素晴らしいが、いくら出来の良い回想記も原本には敵わない。私は、後に述べる事情でワープロに手を染めつつあったが、早速練習を兼ねて七冊の日記をワープロに打ち込んでいったのである（随分時間は掛かったが、お陰で文章の入力には苦労しなくなった）。入力していく内に益々貴重な史料であるとの確信を深めた私は、今度は本学部の紀要に翻刻したい旨を申し出た。富士夫氏はこれまた直ちに了解して下さり、かくして本稿が成ったのである。

ただ日記は、日記であるだけにかなりプライバシーに属す部分を含む。私はどうしたものかと富士夫氏に相談したのであるが、氏は「もう昔のことで、済んだことだから」と、一言も注文を付けることなく、すべてを公表することを許された。本稿に伏せ字の類が一切ないのはそうした事情によるのであって、富士夫氏の研究者としての見識に深甚の敬意を表するものである。

また武の出身校である鯖江市立吉川小学校長三浦一元氏、福井県立福井農林高等学校長田代忠昭氏、同校の同窓会である福井県農友会事務局次長松下静氏は、それぞれ各校架蔵の史料の閲覧に便宜を図って下さった。福井農林同期の栗田始、伊藤総左衛門の両氏には、中学時代の武の人柄について御教示いただいたが、「クソ」が付くほど真面目であったそうである。鯖江市資料館の島河魔利子さんにはいつもながら調査などでお世話になった。さらに中国の地形図を見せて下さった国学院大学林和生氏、「上」を御一覧後、直ちに軍隊用語に関するコピーをお送りいただいた陸軍幼年学校出身の道重哲男氏、『従軍記録』の編者稲木信夫氏、これらの方々に心から感謝する。

最後に稍私事に亘るが、本学部助教授寺尾健夫氏にもお礼申し上げなければならない。私は、「初期化」などという奇妙な漢字や、キテレツとしかいいようのないカタカナに拒絶反応を起こして以来、ワープロに手を触れることをしなかった。そのような私に寺尾氏は、ワープロ（パソコン）の有用性を諄々と説き、研究者として絶対に導入すべきであると繰り返し力説された。根負けした私は寺尾氏の言を容れて弟子入りしたが、さすがに教育学者、誉めたり、好かしたり、宥めたり、手取り足取りの指導よろしきを得て、遂にこの世界に引き込まれてしまったのである。

本稿の「上」はワープロ原稿であったが、「中」と「下」はパソコンである（ワープロからパソコンへの転換も寺尾氏による）。恐らくワープロなかりせば、原稿用紙の升目に一文字ずつ書き入れていく勇気は、とても湧かなかったに違いない。そうするとこの「陣中日記」も、触りの部分を何処かに出してお茶を濁したかもしれぬが、全文が日の目を見ることはなかったであろう。その意味で本稿は、寺尾氏のお陰で出来たようなものといって差し支えないのである。